

■豊川市防災センター1階の豊川まるごとプロジェクト等でも各種防災情報を入手できます



■昭和28年の13号台風による高潮被害（御津町）



■大雨による冠水状況（小坂井町：R5.6.3朝撮影）

- 1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P1
- 2 自然災害と地形・・・・・・・・・・・・・・・・ P2
- 3 市域における災害の歴史・・・・・・・・ P4
- 4 災害対応のあゆみ・・・・・・・・・・・・ P16
- 5 災害にまつわる伝承・記念碑・関連史跡・・・ P20
- 6 水害アーカイブ写真（今昔対比）・・・・・・ P24
- <参考資料> 引用・参考文献、豊川市災害年表・・・ P26

第2版令和5年8月発行（初版令和3年1月）

豊川市防災センター

## 災害に学ぶ ―とよかわ防災史話―

### 1 はじめに

豊川市内では、令和5年6月2日に24時間雨量が400mmを超える記録的な大雨により土砂崩れや中小河川の越水、内水氾濫等が発生し、住宅の全壊2棟、床上浸水264棟、床上浸水が263棟の甚大な被害がありました（表紙写真）。

災害と言えば、全国的にみれば平成23年3月の東日本大震災や平成28年4月の熊本地震などの地震・津波被害、また風水害では平成30年7月豪雨、令和元年東日本台風、令和2年7月豪雨、令和3年7月の熱海市の土石流災害などが記憶に新しく、他にも、火災では平成28年の糸魚川商店街の大火災、火山噴火では平成26年の御嶽山の噴火、そして感染症の流行も災害の一つとして捉えれば、令和2年春から世界中で猛威を振るった新型コロナウイルス感染症の流行など、近年では、各種災害の発生により多くの生命や財産が失われ、社会生活が脅かされる状態が続いています。

豊川市を含む東海地域では、南海トラフ巨大地震がいつ起きてもおかしくないと言われ、その地震・津波被害が危惧されるだけでなく、全国的に異常気象が頻発する中、台風・竜巻・豪雨・洪水などの風水害の危険とも常に隣り合わせにあると言えます。「天災は忘れた頃にやってくる」とした戒めは決して他人事ではなく、私たちは、過去の災害を教訓に常に備えを忘れず、自助・共助・公助それぞれを高めていかなければなりません。

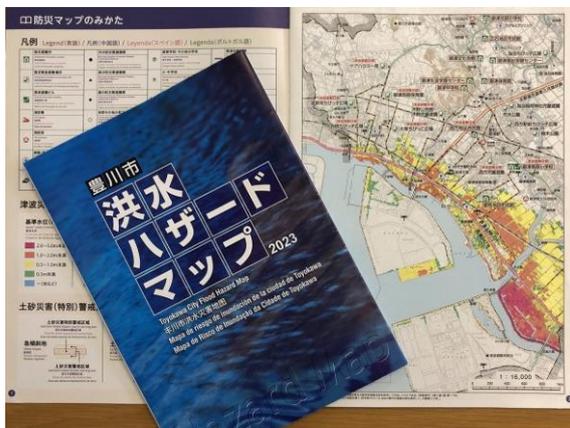
そこで、市域で発生した過去の災害を災害種別にまとめて特徴を明らかにするとともに、災害対応のあゆみと題して有史以来の各種災害対策や先人の防火・防災に対する祈りや願

いについて紹介し、併せて市域の災害伝承碑や災害にまつわるこぼれ話の紹介を行う『災害に学ぶ―とよかわ防災史話―』を作成し今回改訂を行いました。

皆さんがお住まいの地域について、過去にどのような災害があったかを本書で学びとり、また併せて「防災マップ」や「洪水ハザードマップ」をご確認いただき、市民一人一人がいざという時にどのような行動をとれば良いかの参考としていただけたら幸いです。



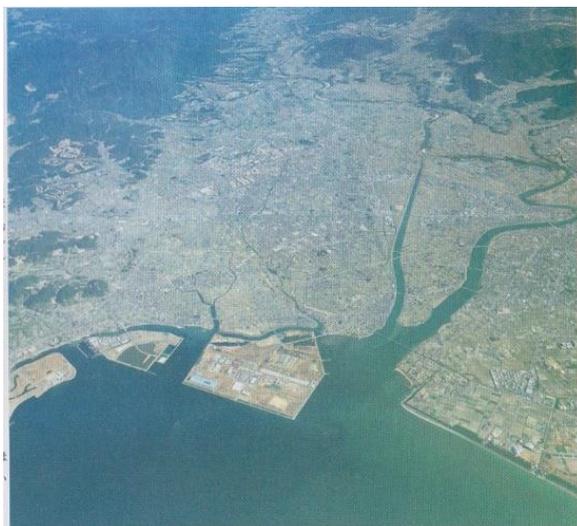
昭和12年7月の当古祭礼日の洪水(市史より)



洪水ハザードマップ等写真(2023年版)

## 2 自然災害と地形

本書の巻末にまとめた豊川市域の災害年表を見れば、市域では、特に風水害に幾度となく見舞われてきたことがわかりますが、風水害に限らず各種自然災害は、その地域の地形や地質と密接に関わり、それがどのように形成されてきたのかを理解することが災害に備える



三河湾上空から見た豊川市（南西上空より）

基礎知識として重要です。

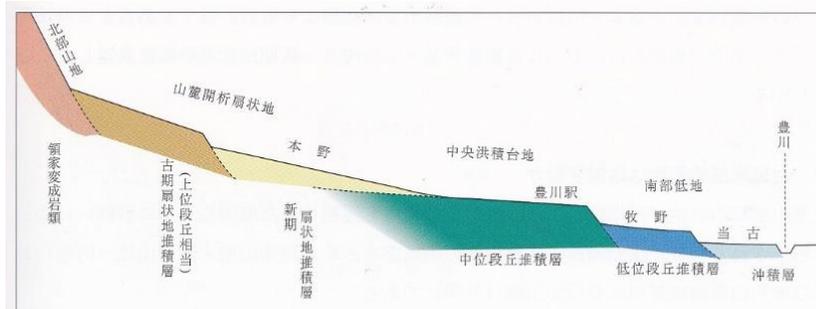
**豊川市の地形：**豊川市域は北西部に山地を控え、南西部は三河湾に接し、東部には一級河川豊川が流れ、市域東南部には豊川沿いの沖積低地が広がり豊橋平野の一面を占めています。

豊川中・下流域沿岸の地質の最も大きな特徴は、豊川の流路に沿う中央構造線という大断層を境としている点で、岩質が内帯（豊川の北側）と外帯（豊川の南側）とに大きく二分され、山容も異なっています。

内帯は北部山地や西部山地と呼ばれる山地によって占められ、両山地は更に北西から南東方向に延びる音羽川断層線谷（御油から岡崎市美合まで続く音羽川断層は、変位速度の小さい活断層の可能性があるとされる）によって分断されます。山地を構成する基盤岩は、領家変成岩類の珪質片麻岩・砂質片麻岩からなり、外帯は三波川変成岩類の変輝緑岩などが見られ、いずれも風化しにくい反面、雨水を吸収しにくい地質条件を備えています。

北部山地の麓には「山麓開析扇状地」が発達しており、それらは古期扇状地と新期扇状地とに分けられます。市役所のある市中心部をのせる台地は、地元の人から「上郷（うわごう）」と呼ばれ、地形区分では「中央洪積台地（小坂井台地）」とされ、その主な部分は地質時代の豊川河床の砂礫によって構成され、中位段丘に相当するもので、扇状地や中央洪積台地に浸透した地下水は伏流水となり、かつては段丘崖沿いに多くの湧水がわき、湧水を用いた洗い場を見ることができました。

また段丘崖から豊川河床までの低地は「南部低地」にあたり、地元では「下郷（したごう）」と呼ばれ、そのうち牧野町周辺



北西—南東方向の模式断面図（市史より）

は低位段丘に相当し、他は沖積低地の自然堤防や旧河道からなり、人間が手を加える以前の豊川は、網の目状に幾筋もの流れが見られ、流路が固定していませんでした。

**地形と過去の自然災害の特徴：**今から約 2250 年前に遡る弥生時代中期以降、人々は水稲耕作のため沖積低地の自然堤防上に集落を営むようになり、豊川下流域においては篠東町の篠東遺跡や瓜郷町（豊橋市）の瓜郷遺跡の発掘調査により、木製農具を用いた弥生人の生活様式が明らかとなっています。弥生時代に始まったこうした低地での暮らしは、ひとたび大雨が降れば耕地や集落が冠水する危険にさらされ、洪水との戦いそして共生の歴史であったとも言えます。



瓜郷遺跡の弥生時代の復元住居

河川や水路の氾濫や人為的に設けた堤防の決壊等による水害は、河川地形とも深く関連しており、川が蛇行したり合流する箇所では氾濫や決壊が起きやすくなります。豊川下流域では江戸時代以来、霞堤と称される不連続堤と遊水地のセットによる洪水対応の治水システムの運用により、出水期の洪水被害を軽減させてきた歴史があり、現在でも霞堤地区の洪水対策が進められています。

また沖積低地は地震の際に液状化現象を起こし易く、愛知県内でも濃尾平野における低地の遺跡の発掘調査で過去の液状化現象を物語る噴砂の痕跡が数多くの遺跡で確認されており、過去繰り返し発生した南海トラフの巨大地震の発生を物語るものとも言われています。新田開発や埋め立て等が行われた三河湾沿岸部の低地や臨海埋立地も同じく液状化現象や地盤沈下を起こし易いと言え、

こうした沿岸部は台風による高潮や巨大地震による津波の危険とも隣り合わせています。

一方、中央洪積台地は安定した地形で低地に比べ災害の心配は少ないといえますが、山麓部は場所によっては急傾斜の崩落、地滑りの危険があることから、皆さんのお住まいの場所や通勤場所・通学場所について、ハザードマップ等により災害の危険性を予め確かめておくことが大切です（参考資料：豊川市 HP 掲載『とよかわの地名から防災を考える』）。



南部低地の地形略図（市史より）

### 3 市域における災害の歴史

#### (1) 風水害（暴風雨・高潮・洪水・土砂災害・竜巻）

風水害には、台風に伴う暴風雨や高潮、梅雨や台風による大雨・洪水・土砂災害のほか、竜巻による被害があります。豊川市の災害年表をみてわかるように、記録に残る主要な災害の多くは風水害が占めています。

**暴風雨・高潮：**『続日本紀』によれば三河地域で既に奈良時代に台風等による暴風雨の被害があったことが知られ、中近世の古文書にも具体的な記録が残されることがあり、豊川市周辺も台風の通過や上陸により幾度となく被害を被ったことが知られます。

台風が関係したと推定される暴風被害としては、江戸時代の記録には、家屋の倒壊・破損の被害をはじめ、豊川御林や砥鹿神社（本宮山）や財賀寺をはじめとする社叢・寺叢の倒木、東海道の松並木の倒木記事等が散見されます。このうち文化5年（1808）7月25日の台風では牛久保村では全壊家屋が47棟を数え、財賀寺では本堂が建て直しを余儀なくされる程の被害を受け、砥鹿神社の樹木も合計440本が折損するなど、市内各地で暴風被害があったことが窺えます。また天保7年（1836）8月13日の台風では、小田渕村では東海道の松並木のうち5本が根こそぎ倒れ道をふさぎ、一宮村でも倒壊家屋11軒を数えたことが知られます。明治時代以降も、台風が関係したと推定される暴風被害の記事が散見されますが、明治14年（1881）11月に大風により長沢東校舎が倒壊したとの記事が見られるほか、大正14年（1925）9月11日の台風では県立高等女学校校舎の一部が倒壊し、また翌大正15年9月4日の台風では宝飯郡下地村（現豊橋市）の津田小学校校舎が強風で授業中に倒壊するなどし、宝飯郡下で児童を中心として死者14名負傷者51名を出す人的被害があるなど、当時は暴風による学校施設の倒壊事故も起きていたことが知られます。昭和の時代の暴風被害としては昭和28年（1953）9月25日の台風13号、昭和34年（1959）9月26日の台風15号（伊勢湾台風）が有名ですが、後者の伊勢湾台風では、旧豊川市域で死者1名、重軽傷者19名、住家の全壊63戸、半壊94戸を数える大きな被害を受け、南部中学校の校舎第3棟の屋根が崩落したのをはじめ、東部中学校・御津中学校・小坂井中学校といった学校施設の被害も甚大で、下長山の熊野神社や豊川稲荷境内でも多くの樹木が倒れ、国指定天然記念物の御油の松並木も十数本が倒れるなどの暴風被害がありました。

その後の暴風被害としては、平成14年10月1日の台風21号では強風により御油の松並木の太木2本が倒れた他、平成21年10月8日の台風18号で



御油の松並木の倒木被害（H14・10）

も伊勢湾台風以来の強風が吹き荒れ、街路樹や公園・学校等の樹木 149 本が倒れるなどの被害がありました。

一方、台風通過に伴う高潮被害については、古くは戦国時代の天文 9 年（1540）8 月の暴風雨で、三河湾沿岸部の御馬や伊奈では大きな被害を受けたことが記録に見られ、伊奈の東漸寺は、古くは前芝（現豊橋市）に所在していましたが、この時の高潮で流され現在地に移されたとの言い伝えがあります。江戸時代になると、寛永 13 年（1636）8 月には御馬で高さ一丈（約 3m）余りの高潮が発生し、20 戸を残しその他の家は流されたと記録にあります。以降、御馬では万治 3 年（1660）に高さ 2～3 尺（約 60～90 cm）の高潮が発生、延宝 8 年（1680）閏 8 月には高さ 4 尺（約 1m20 cm）の高潮が発生し、正徳元年（1711）8 月には高さ 4 尺余りの高潮が発生して死者 4 名、142 戸全壊の被害があり、その都度潮除堤（防潮堤）が破損したことが記録に見えます。その後も御馬では、享保 3 年（1718）9 月に高さ 3 尺（約 90 cm）の高潮が発生し、文化 5 年 9 月の台風では西南の上ヶ浜で高潮被害があり、天保 7 年（1836）8 月の台風では高さ 3 尺の高潮が発生して御馬湊に被害があったことが記録に見え、翌天保 8 年 8 月にも高潮が起こったと記されています。

明治時代以降の御津町沿岸部の高潮被害については、明治 22 年（1889）9 月 11 日の台風通過に伴う高潮と、先述の昭和 28 年の台風 13 号、そして昭和 34 年の台風 15 号（伊勢湾台風）に関するものがよく知られています。このうち明治 22 年の高潮については、三河湾・伊勢湾一帯で高潮被害が発生し、市域でも沿岸部で大きな被害が見られ、強風と高潮により死者 11 名を出した大草では、死者を弔った「水死者追弔碑」が、後日共同墓地に建てられました（P23 参照）。

また昭和 28 年 9 月 25 日の台風 13 号は、最低気圧が 957hPa、伊良湖で最大風速 39.9m、名古屋港で最高潮位 2.27m を観測した大型の台風で、進路東側にあたる三河湾沿岸部は暴風と高潮により甚大な被害を受けました。市域でも沿岸の石積み海岸堤防が 2,805m にわたって決壊・大破して海水は南部小学校をこえ、建物全壊 30 戸、半壊 132 戸、流失 16 戸を数える大きな被害がありました。



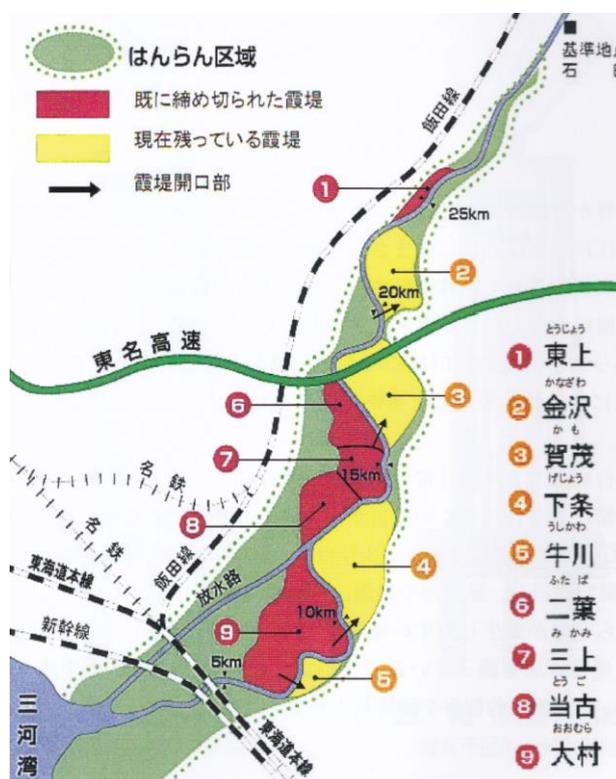
台風 13 号の高潮被害（御津町制五十年写真集より）

そして、昭和 34 年 9 月 26 日の伊勢湾台風は、最低気圧が 939hPa、伊良湖で最大風速 45m、弥富で最高潮位 4.46m を観測した超大型の台風で、伊勢湾沿岸では高潮、強風、河川の氾濫により甚大な被害を受け、名古屋市や弥富町などで暴風と高潮によって大規模な浸水が起こり、全国で死者行方不明者が 5 千人以上を数える大災害となりました。豊川市域では、暴風雨による被害はあったものの、昭和 28 年の台風 13 号被害の後に整備された鉄筋コンク

リート製の沿岸堤防により高潮被害は軽減されました。以降、市域では高潮に関する被害は特にみられませんでした。平成 21 年 (2009) 10 月 8 日未明の台風 18 号の上陸の際には、伊良湖で最低気圧 956.4hPa を観測して早朝には三河港で最高潮位 3.15m の高潮が発生したことにより、豊橋市の神野西埠頭では浸水でコンテナが移動したり、豊川市内でも御津町御幸浜や佐脇浜の埋立地で浸水被害を被ったりするなどの高潮被害がありました。

**洪水**：弥生時代以降、人々の生活の場が沖積低地にも拡大したことにより、洪水との戦いが始まりました。昭和 61 年 (1986) に行われた為当地区の条里遺跡の発掘調査では、音羽川の氾濫によるものと推定される平安時代終わり頃の洪水性の砂層に覆われた埋没条里遺構が検出されています。しかし、水田がすぐに復旧された様子は窺えず、古今を問わず、自然災害からの復旧には手間と時間を要したことがわかります。

古代から中世にかけ、豊川のような大河川は網の目状に流れ流路は定まっていなかったが、江戸時代の初期頃から順次整備された霞堤の築造により、豊川は現在に近い流路に徐々に固定されていきました。霞堤の差し口（堤防の開口部）から溢れた水は、時間の経過と共に引いて元の川に流れ込み、差し口付近には上流から運ばれた土砂が堆積し、その土砂には豊かな養分が含まれ、川岸一帯の地味（土地の質）を向上させました。当古や院之子、土筒といった下郷の村々では、大雨による出水の際には田畑がほぼ冠水しカサ上げの低い家屋は浸水したことから、経験と知恵により、豊川の水位が高まると即座に一階の物品を二階に上げ、便所や井戸に蓋をするなどして対応し洪水をしのぎました。



豊川の霞堤の分布（母なる豊川流れの軌跡より）

記録によれば、江戸時代に豊川流域では数年に一度の割合で大規模な洪水が発生したことが確認できますが、洪水が頻繁に起こった理由としては、草肥の採集場所として山地が対象とされ流域の森林が伐採され山々が草山化したことが、流域一帯の保水力を弱め、下流に鉄砲水をもたらす要因となったと考えられています。

巻末の豊川市の災害年表を見ると、明応 7 年 (1498)、文禄 4 年 (1595)、慶長 15 年 (1610)、元禄 4 年 (1691)、正徳 5 年 (1715) の洪水は豊川の流路の一部変更を伴うような大水害で



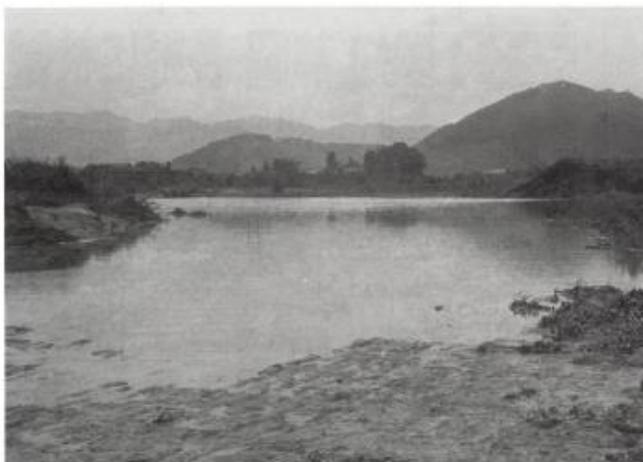
正徳5年楽筒・楠木村困堤御普請願絵図



同絵図イラスト（市史より）

あったことが知られ、現在、三谷原と当古・土筒・院之子の境を流れる古川は、明応7年～文禄4年までの97年間は豊川の本流筋であったことがわかります。また、江戸時代には音羽川・佐奈川などの中小河川でも洪水がたびたび発生したことが記録に残り、豊川や中小河川の氾濫・浸水により、東海道が冠水して通行止めになることもあったようです。

明治時代以降も、豊川や中小河川の堤防の決壊や水害の記録が散見されますが、豊川では愛知県により明治17年（1884）に下流域の不連続堤部分の締め切り工事が行われたにも関わらず、その後も水害が頻発して霞堤の差し口部分の締め切り工事だけでは豊川の鉄砲水の処理ができないことがわかって、大正時代に入ると治水運動が本格化することとなり、戦後の豊川放水路の建設へと繋がっていきました。



▲ ① 本川左岸堤の決壊(宝飯郡一宮町全沢)

昭和44年の豊川堤防決壊（写真集中部の水害より）

明治時代以降の犠牲者を出した水害記録としては、明治29年（1896）9月の大雨により中小河川が氾濫し宝飯郡下でも死者1名の被害があったほか、明治31年（1898）9月の台風では宝飯郡下で死者4名、明治37年（1904）7月の台風では宝飯郡下で死者5名、明治44年（1911）6月の台風では宝飯郡下で死者2名、大正12年（1923）6月の大雨では宝飯郡下で死者2名を数えたほか、昭和以降の記

録としては、昭和 44 年（1969）8 月の台風 7 号に伴う暴風雨では豊川の堤防が 2 か所延べ 100m にわたって決壊し、旧一宮町の江島・東上・金沢の各地区 300 余戸が一時孤立し災害救助法が適用されるに至る被害があり、また昭和 49 年（1974）7 月の七夕豪雨では旧音羽町で消防団員が帰宅後死亡したり、平成元年（1989）9 月の台風 22 号に伴う大雨では旧一宮町で下校途中の小学生 1 名が側溝に落ち犠牲になるなどの被害があり、浸水被害や農作物被害まで拾い上げれば、災害年表を見てわかる通り、現在でも毎年のように風水害の被害が発生していることを確認できます。



七夕豪雨による白川堤防の決壊（S49・7：市史より）

なお、令和 5 年 6 月 2 日の大雨は、市内では人的被害はなかったものの、諏訪川、佐奈川、白川沿いの蔵子・桜町・小田渕地区で越水や内水氾濫により床上・床下浸水や道路の冠水被害が発生しました。また小坂井町・篠東町付近の善光寺川流域でも豊川放水路の水位上昇により内水氾濫が発生して国道 1 号の通行止めを伴う冠水が長時間続き、金沢町等の霞堤地区でも浸水被害が及ぶなど、車両の水没も含めて浸水被害や農業被害が広範囲に及ぶ甚大な被害をもたらしました。



小坂井町宮下交差点付近の冠水状況（R5.6.3朝）

**土砂災害：**風水害の一つに土砂災害がありますが、山地の森林の伐採などが土砂災害の一因ともなります。先述のように江戸時代には山地の草山化が進んで河川流域の保水力が低下していましたが、千枚田で有名な新城市四谷地区では、明治 37 年（1904）7 月 10 日の台風に伴う大雨で大規模な山崩れ

が発生し、死者 11 名、家屋流失 6 戸、家屋全壊 5 戸を数える大災害が発生しました。市域の土砂災害に関する記録としては、江戸時代の文化 9 年（1812）に大雨で本宮山や財賀の各所で土砂崩れがあったとの記事や、文政 10 年（1827）に赤坂で山崩れが起こって田が土砂に埋まったとの記事、明治 25 年（1892）6 月に上長山で大雨による山崩れがあり家屋 1 棟半壊・負傷者 1 名、県道わきの山崩れで 1 人が死亡との記事が見え、山沿いの地域では土砂災害の危険とも隣り合わせていることが知られます。

また令和 5 年 6 月 2 日の大雨でも、御津山中腹で発生した土砂崩れが住宅を巻き込みましたが、幸い住人は親戚宅に避難して無事でした。

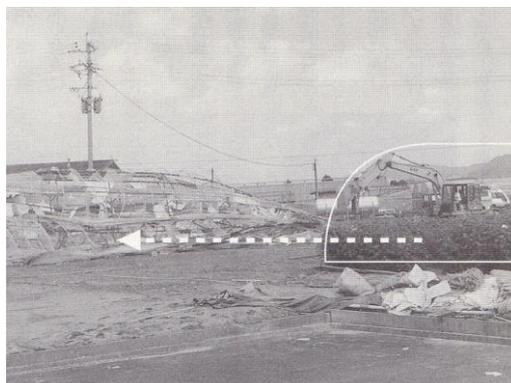
**竜巻**：東三河の豊橋市・豊川市・蒲郡市といった三河湾沿岸地域は、過去にもたびたび竜巻被害に見舞われている地域であり、台風の接近や前線の通過などによって大気が不安定となった際に、豊橋平野南部あるいは三河湾から北上するように竜巻が発生・通過することが多く、平成 11 年（1999）9 月 24 日に豊橋市で発生した竜巻は、藤田スケールで F3 相当の、日本で発生した竜巻の中でも最も強いクラスのものでした。

市域で最も古い竜巻の記録は、江戸初期の慶長 19 年（1614）8 月 6 日に吉田城下から牧野及び御津町赤根を襲った竜巻に関するもので、牧野で 11 軒、赤根で 11 軒を吹き飛ばす強風が吹き荒れたとされます。明治以降の記録としては、明治 34 年（1901）12 月 25 日に平井から伊奈・桜町・八幡にかけ延長 7.5 km にかけて竜巻被害があり、桜町と八幡を中心に死者 2 名、負傷者 12 名、全壊建物 14 棟、半壊・破損 52 棟に及ぶ大きな被害があったとされます。更に明治 36（1903）年 7 月 9 日にも大塚（蒲郡市）から御津町大草・広石をぬけ御油・萩にかけ延長 8 km に及ぶ竜巻があり、死者 2 名、負傷者 3 名、家屋全壊 10 棟、半壊・破損 10 棟を数える大きな被害があったほか、大正元年（1912）8 月 24 日には小坂井・国府で住家全壊 6 棟の被害が、大正 4 年（1915）8 月 5 日には長山駅付近で竜巻の発生が、また昭和 3 年（1928）8 月 30 日には北金屋及び八幡で竜巻被害があったことが知られ、その他隣接する豊橋市では昭和 16 年（1941）11 月 28 日に大崎から牛川にかけ 8 km にわたり竜巻が通過し、死者 12 名・重傷者 30 名、全壊家屋 44 戸を数える甚大な被害があったことが知られます。

戦後は、昭和 29 年（1954）8 月 18 日に御津町西方で、昭和 31 年（1956）9 月 9 日に国府で、また同年 9 月 26 日には御津町下佐脇及び小田渚で竜巻被害があり、昭和 33 年（1958）12 月 26 日には突風により北金屋で木造 2 階建てアパートが倒壊する被害が、そして昭和 44 年（1969）12 月 7 日には、豊橋市内で再び大きな竜巻被害があり、下地・大村で死者 1 人、重傷者 12 人を数えました。その後昭和 54 年と昭和 60 年に突風による建物被害があり、また平成 11 年（1999）9 月 24 日には先述の F3 クラスの竜巻を含む大小の竜巻が豊橋・小坂



昭和 31 年の国府町竜巻被害（市史より）



平成 11 年の院之子町竜巻被害（市史より）

井・蒲郡の3か所で発生し、豊川市内では萩山や千両、牧野地で重傷者2名、軽症者36名、建物全壊1棟、半壊2棟などの被害がありました。近年では、平成29年(2017)8月7日に前芝(豊橋市)から御津町にかけて竜巻が発生し、市内でも住宅一部損壊7棟、ビニールハウス破損等の軽微な被害があった他、令和3年8月9日には竜巻の可能性の高い突風が発生して光輝町から三蔵子町にかけて被害があり、金屋中学校でも体育館・プール・校舎などに被害がありました。

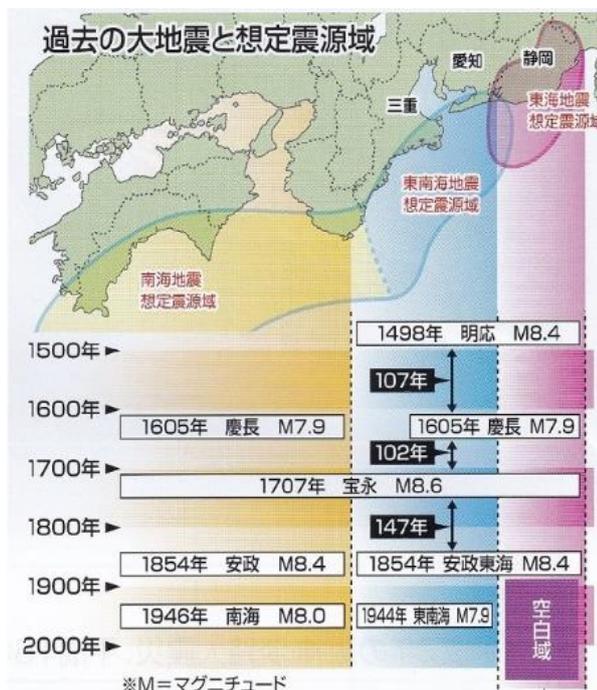


突風で破損した金屋中学校のフェンス

## (2) 地震・津波

**地震**：地震は、大きく「海溝型地震」と内陸の活断層で発生する「断層型地震」の二つのタイプに分けることができます。豊川市周辺に被害をもたらした地震をみると周期的に起こる巨大地震があり、その代表が東海地方から西日本太平洋側に及ぶ海溝型地震である南海トラフ地震です。

市域を含む東海地域で被害が確認される南海トラフ地震は、今から1300年以上も前の西暦684年に遡る白鳳地震をはじめとして、次は西暦887年に発生した仁和地震、その次が西暦1096年に発生した永長東海地震(2年半後の1099年には康和南海地震が発生)、そして京都や奈良で被害のあった1361年の正平地震を挟んで1498年に発生した明応東海地震では紀伊半島から房総半島まで津波が押し寄せ、この津波で浜名湖が海とつながったとされます(その個所を今切(いまぎれ)と呼びます)。その後も津波を伴うような地震は1605年の慶長地震、約1か月後に富士山が噴火した1707年の宝永地震、幕末に32時間を隔て続けて発生した1854年の安政東海地震と安政南海地震と続きます。



(防災対策 ver7 より)

このように南海トラフでは100年から200年の間隔でマグニチュード8クラスの地震が発生しており、安政東海地震の90年後の昭和19年(1944)12月7日に昭和東南海地震が

発生し、続けて2年後の昭和21年（1946）12月21日には昭和南海地震が発生するなど、東海地震と南海地震が連動して起こることも多いことから、次の南海トラフ巨大地震が起きる時期が近づいていると予測されています。

昭和東南海地震の発生は戦時中であつたため詳しいことが分かりませんが、豊川市内では住家全壊7戸、半壊29戸の被害があつたことが知られています。また翌昭和20年1月13日に発生した断層型地震である三河地震では、豊川市域では幸い目立った被害はありませんでしたが、現在の幸田町深溝や蒲郡市形原では地表に断層が現れる程の大きな揺れに見舞われ、2,300人余りの死者を数える大きな被害がありました。ちなみに断層型地震としては、東海地方では明治24年（1891）10月28日に起きた濃尾地震が有名ですが、宝飯地域では死者1名、負傷者5名、住家全壊12戸、半壊49戸の被害が記録されています。



三河地震により出現した深溝断層（額田郡幸田町）

戦後は、市域で特に大きな地震被害は発生していませんが、平成9年3月に豊橋市で震度5弱を観測した愛知県東部地震では豊川市でも震度4を観測し、市役所の本庁舎の窓ガラス約100枚が割れるなどの被害がありました。また最近では、令和2年9月27日の静岡県西部を震源とするマグニチュード5.1の地震で豊川市（一宮）では震度4を観測しましたが被害はありませんでした。

**津波**：10mもの高さの津波に襲われたことのある渥美半島の太平洋側の沿岸部と異なり、豊川市域周辺の三河湾沿岸部で発生した津波の高さは宝永地震の際に3～5m、安政東海地震の際に3～4m、昭和東南海地震の際に1m、三河地震の際に1m、昭和南海地震の際に最大2mであつたとされます。宝永地震では下佐脇で田畑に浸水被害があり、安政東海地震では御馬湊で船積み前の廻米（江戸などに廻送する米穀）500俵が流され、小坂井では東海道の松並木まで津波が何度も遡上したことが記録に見えます。



昭和5年御馬湊周辺（御津町制五十年写真集より）

なお、安政東海地震の瓦版等に「御油宿や赤坂宿が津波に襲われ被害が生じた」との記事が見られますが、これは明らかな誤報記事と考えられ、御油・赤坂では地震の揺れもさほどひどくはなかつたようです。

### (3) 火災

火災：人災的側面の強い災害の主なものとして火災があげられます。江戸の町でも幾度も大火が発生したように、御油宿や赤坂宿のような町並みでも大火が発生し、人命や財産が奪われることがありました。記録に残る火災としては、江戸時代初期の慶長 14 年 (1609) に御油宿と赤坂宿でそれぞれ大火があったことが知られ、御油宿では慶長 16 年 (1611)、天保 4 年 (1833) にも火災があり、天保 4 年



昭和 30 年古宿町の農機具工場火災 (市史より)

の大火では被災家屋 100 軒、本陣 2 軒を焼失したとされます。一方赤坂宿では宝永 6 年 (1769)、延享 4 年 (1747)、寛政 2 年 (1790)、文化 6 年 (1809) とたびたび大火があったことが記録に見え、このうち宝永 6 年の大火では赤坂宿の戸数 360 戸のうち約 8 割にあたる 280 戸を焼失する大火であったことが知られます。江戸時代には、他にも寛文 9 年 (1669) の八幡西明寺の本堂等を焼失する火災や、享保 2 年 (1717) の大木の玉宝寺を火元とする火災、宝暦 10 年 (1760) の豊川村の焼失家屋 15 軒を数える火災や享和 2 年 (1802) の妙巖寺 (豊川稲荷) の建物火災、安政 2 年 (1855) の牛久保村の焼失家屋 37 軒を数える火災などが記録に見え、明治時代以降も一宮の宮前の大火や上長山分学校の火災、明治 18 年の赤坂中央部の火災と続き、大正から戦前にかけては一宮や豊川停車場通り、下長山、牛久保、松原、国府における建物火災の記事の他、山林火災の記事も散見されます。

戦後は、昭和 30 年 (1955) に古宿で農機具工場 9 棟、付近民家 17 戸を焼失する火災があったほか、山林火災の記事が散見され、平成 6 年には御津町大恩寺の重要文化財の念仏堂が焼失するという惨事に見舞われましたが、幸い、近年では大規模な火災は発生していません。

### (4) そのほか (噴火・干ばつ・飢饉・疫病・戦災)

噴火：火山の噴火には降灰が伴い、周辺地域では自然環境にも大きな変化をもたらすことがあります。幸いこの地域では火山の噴火により大きな被害を被ったことはありません。しかし、今から 2 万年以上も前の旧石器時代における南九州の始良カルデラの噴火による火山灰が市域にも降灰したことが確認されている他、今から約 6 千 3 百年前の縄文時代にも南九州の鬼界カルデラの噴火による火山灰が市域に降灰したことが確認され、こうした火山の大噴火の際には、火山に近接する降灰地域では人間の生活も脅かされるような自然環境の変化があったことが推測されます。

その後、平安時代には伊豆の神津島の噴火による火山灰の降灰が三河国を含む16か国に及んだことが記録に見え、江戸時代の安永8年(1779)には桜島の噴火の降灰が財賀で確認され、4年後の天明3年(1783)には浅間山の噴火爆発の音が財賀で聞こえたとの記録があるように、火山の噴火も決して他人事ではありません。

**干ばつ・飢饉(ききん)**：干ばつとはいわゆる日照りのことで、他の自然災害やイナゴなどの害虫被害と合わせて農作物の収穫量が減ることにより、生死にかかわる深刻な飢饉が生じることもあります。干ばつの記録は、豊川市の属する三河国では和銅3年(710)の干ばつ(飢饉)の記録をはじめとして奈良時代～平安時代にかけて複数回記録に登場し、古代に干ばつによる農作物被害がたびたび起こっていたことが知られ、飢饉の際には人民に対し施しも行われたことが知られます。

中世の干ばつ・飢饉に関する記録はあまり知られていませんが、災害年表を見てわかるとおり、江戸時代には干ばつ・飢饉の記録が散見され、日照りが続くと本宮山においてたびたび雨乞いの行事が行われたほか、虫害を減らすために虫除け(虫送り)の行事や祈祷も行われたようです。また全国的に飢饉が発生した天保の飢饉の際には、天保7年(1836)9月に現豊田市域において加茂騒動と呼ばれる大規模な一揆が起き、岡崎・挙母藩の出兵により鎮圧されました。その後、赤坂代官所にて吟味取り調べがあり、赤坂に牢屋を作って囚人8～9百人が収容され、赤坂刑場跡には赤坂牢で獄死した4人の7回忌に合わせ建てられた「南無妙法蓮華経」の石碑とともに赤坂刑場跡の記念碑が建てられています(P22参照)。

明治以降は、干ばつ・飢饉の大きな被害は記録されていませんが、いつの時代にも水不足は発生しており、農作物等に被害がありました。昭和60年(1985)1月と令和元年(2019)5月には「東三河の水がめ」とされる宇連ダムの貯水率が0%となる事態も生じるなど、水不足は今後も十分に起こり得る災害の一つです。

**疫病**：疫病に関する記事は、慶雲3年(706)に三河国等で疫病が流行し医師と薬を与えてこれを治療したとの記事があり、天平9年(737)には天然痘が全国的に大流行し、藤原四兄弟をはじめとする中央政界の大物や多くの人々が死亡し、聖武天皇が国分寺建立の詔を出す一つのきっかけとなったとも言われています。令和の時代に流行した新型コロナウ



八幡町で発見された始良火山灰(市史より)



令和元年の宇連ダムの濁水で現れた昔の橋

イルス同様、この時、天然痘は朝鮮半島の新羅国に派遣されていた遣新羅使の往来などによって海外から流入したと考えられ、奈良時代になり海外との交流や都と地方の交通整備が進んだことが疫病の流行を広める結果となってしまいました。その後、江戸時代になると寛永 17 年 (1640)、寛永 19 年 (1642)、天和 2 年 (1681)、享保元年 (1716)、元文元年 (1736) にも三河における疫病や飢饉の記事が見え、いつの時代にも疫病の流行により多数の死者が出たことが知られます。

**戦災:** 戦時中の空襲被害も火災同様に人災的側面の強い災害と捉えることができます。豊川市は昭和 14 年 12 月に東洋一の兵器工場と称された豊川海軍工場の開庁したことにより、昭和 18 年 6 月に軍主導のもと、豊川町、牛久保町、国府町、八幡村の三町一村が合併して誕生しました。

豊川海軍工場は、最盛期には 5 万人以上の人々が働いていたとされますが、戦局の悪化とともに未婚女性の女子挺身隊員や動員学徒が生産現場を支えることとなり、終戦間際の昭和 20 年 (1945) 8 月 7 日の米軍の B29 爆撃機 124 機からなる大空襲により工場は壊滅的な被害を受け、若者を中心に 2,500 名以上の方々が爆撃の犠牲となりました。



名古屋大学研究所敷地内に残る工場残存遺構

## 4 災害対策のあゆみ

### (1) 風水害対策

風水害に対する備えとしては、まずハード面として川であれば河川堤防、沿岸部であれば高潮や津波を防ぐ防潮堤の整備が挙げられます。豊川のような大河川では霞堤と呼ばれる不連続堤防を整備することにより、出水時の破堤リスクを軽減させてきましたが、差し口から逆流する浸水対策のため、当古や土筒といった霞堤内の集落では、屋敷の敷地をかさ上げし、石垣を積み上げた上に水屋と呼ばれる蔵や母屋を建て浸水対策を図りました。

昭和40年(1965)3月の豊川放水路の完成とともに、霞堤は豊川右岸では全て締め切られ、連続堤防となりました。しかし左岸の4か所(金沢・賀茂・下条・牛川)がまだ締め切られず、近年でもたびたび浸水被害が起きていることから、小堤整備などのハード整備とソフト対策を組み合わせることにより被害をより軽減させていく必要があります。また御津町御馬では海岸に沿って汐除堤と呼ばれる防潮堤が整備されたことが江戸時代の古文



昭和40年に完成した豊川放水路

書や絵図から窺え、江戸中期に基底幅21.8m、高さ3.6mの規模であった汐除堤が、補修を加えるごとに基底幅を広げ、江戸時代後半には基底幅43.6m、高さ3.5mの規模にまで拡大したことがわかります。しかし、こうした一部石積みの堤防も、明治～昭和時代にかけての高潮で決壊することがあり、特に昭和28年(1953)9月の13号台風では御津町沿岸において甚大な高潮被害を受け、その後鉄筋コンクリート製の沿岸堤防が整備されたことにより、昭和34年(1959)の伊勢湾台風では高潮による被害は軽減されました。

一方、ソフト面の対策としては、霞堤地区の出水対応などがあり、屋敷を垣根で囲い屋敷内に水屋を整備するとともに、出水により家屋への浸水が予想されると、事前に便所に蓋をし、家財道具や家族(家畜も含め)を2階や水屋に避難させ、出水が現実となれば、水が引くのを待って片付けや清掃を行いました。過去たびたび水害に見舞われた霞堤地区では、豊川放水路が整備されるまでは、天候から出水を予測し2階等へ垂直避難を行うといった生活の知恵を身に着け、洪水に抗うのではなく、洪水と共生を図る生活を

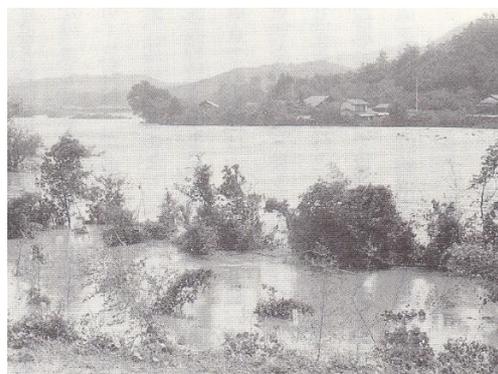


高石垣を設けた土筒の水屋(市史より)

営んできました。また、豊川の金沢、賀茂、三上、行明の渡船は、戦後の橋の整備とともに順次廃止されていきましたが、三上では昭和 30 年 4 月に全国的にも珍しい増水時に水中に没する水潜橋（通称水くぐり橋）が整備され、現在の三上橋が昭和 55 年に整備されるまで、三上の東西地区を結ぶ重要な役割を果たしていました。



三上の水潜橋（昭和 51 年：市史より）



増水時の水潜橋（昭和 38 年：市史より）

風水害対策としては、令和 5 年 6 月 2 日の大雨災害を教訓とすれば、河川の越水や内水氾濫対策としてのハード整備を進めるとともに、各家庭や職場において洪水ハザードマップ等を参考としながら事前の避難準備を話し合い「我が家のマイ・タイムライン」を作成するなど、市民一人一人が「いざという時」に備えておくことが大切です。

## （２） 地震・津波対策

地震はいつ起こるかわかりませんが、過去に大規模な地震災害があるたびに各種耐震対策の法制化が進み、近年では低地における液状化対策や都市部の高層建物における長周期地震動対策なども課題となっています。平成 9 年（1997）に豊川市で震度 4 を観測した愛知県東部地震の際には、災害対策の拠点とすべき市役所本庁舎で窓ガラスの破損被害があったことを教訓に、その後、市役所や学校といった公共施設の耐震化を進めてきました。また、令和 2 年（2020）4 月に市役所敷地にオープンした豊川市防災センターは、免振装置を備えた建物内に常設の災害対策本部室を設け、大地震が起きた際にも自家発電設備により災害対策本部機能が維持できるようになっています。

また、南海トラフ巨大地震の理論上最大想定モデルで高さ 3.5m が予想されている津波対策としては、



免振装置を備えた豊川市防災センター



市道上の津波ライン表示

三河湾沿岸部近くの津波浸水想定地域において、電柱等への標高看板設置のほか、市道上への津波ラインの表示や県道への津波標識の設置を進め、また津波避難ビル3か所を指定し（消防署南分署・御津南部小学校・小坂井西小学校）、対象地域の自主防災会や学校で地震・津波被害を想定した避難訓練を行っています。

その他、御津町佐脇浜の三河臨海緑地に海拔 16.5m の高さの避難用高台と避難の目印となる避難誘導装置「のろしグナル」を令和 2 年（2020）に整備し、また、御津町御幸浜地内に西方大橋へ最短距離で避難することができる「避難用階段」を令和 3 年（2021 年）に整備するなど、臨海地区企業の従業員も含めた市民の安全確保にも努めています。



三河臨海緑地に整備した避難誘導装置（のろしグナル）



西方大橋へ避難可能な避難用階段

### （3） 防火対策

江戸時代には御油宿・赤坂宿や牛久保といった街道筋の町並みで大火が発生し、町並みの再建とともに防火対策が次第に意識されるようになりました。この地域でも、明治から昭和初期にかけて瓦葺き屋根が普及し、地域における消防組織として消防団・自警団の組織化も進み、資機材や詰所、火の見櫓の整備等が徐々に進みました。

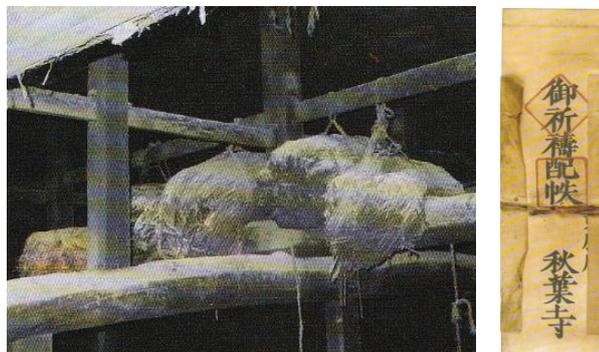
戦後、本市では昭和 23 年（1948）3 月に消防組織法により自治体消防になると同時に消防本部が設置されました。また、消防団はその際 4 団（豊川・牛久保・国府・八幡）20 分団で再スタートしました。その後も消防組織・設備の充実を図り、宝飯郡 4 町との合併前から広域消防体制を順次整え、令和 5 年 4 月現在、市役所北庁舎内の消防本部と諏訪 3 丁目に所在する消防署及び東・西・南の消防署分署と一宮出張所、そして第 1 から第 8 までの方面隊以下 26 分団からなる消防団組織からなり、日々の防火・救急活動にあたっています。



災害対策車を備えた消防署南分署

#### (4) 防火・防災の願い

**秋葉信仰:**「火」、それは暮らしに欠かすことができないものである一方、人命や生活の基盤全てを奪う危険なものです。十分な消防設備のない江戸時代、火災への恐れは今よりずっと強いものがあり、火伏（防火）の靈験あらたかな秋葉山（浜松市）は、人々の心の拠り所として、江戸時代から現代に至るまで広く信仰を集めています。今でも街角に秋葉山常



大橋屋の梁上の俵と秋葉山の古札

夜灯を見ることができ、家庭の台所にも秋葉神社等の紙の札を掲げることがあり、近年改修工事が行われた赤坂宿の旅籠「大橋屋（鯉屋）」では、吹き抜けの梁上に置かれていた俵の調査の結果、江戸時代～昭和前期にかけての総数約1,600点のお札が確認され、このうち秋葉信仰に関わるものが最も多く16%を占めていました。

**虫送り:**秋葉信仰は火防を第一としますが、他にも雨乞いや豊漁などの村や町の様々な祈願にも対応して信仰を広めていきました。市域でも、小田渚の稲荷神社の記録によれば、江戸時代の文政8年（1825）6月には冷夏で土用明けより冷雨がひどくウンカが発生したので虫送りを三度行い、最初の一回は白鳥村で秋葉山への代参で受けた火を、小田渚村はじめ周辺の村々に送ったとされ、秋葉山の火が虫送りの除虫に使われたことが確認できます。こうした虫送りの火祭り行事を復活させた行事が現在でも市田で9月に行われており、伊知多神社から赤塚山の秋葉神社まで松明行列を組み御神火を捧げ、市田の各家の火防安全を祈願する年中行事となっています。



市田の火祭り

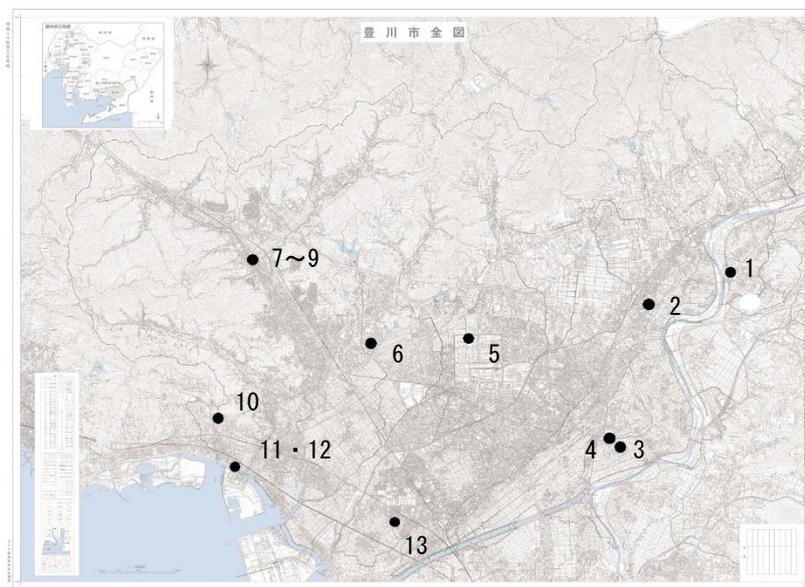
**雨乞い**：赤坂の宮道天神社の夏の祭礼は「雨乞い祭」の異名をもち、山車や神輿渡御などがあり、中でも地元の青年が花魁や武士、娘などに扮する歌舞伎行列がこのお祭りの目玉です。江戸時代、大干ばつの時に雨乞いをしたところ大雨が降ったことからこのお祭りを始めたと伝えられ、その故事にちなみ、神輿の両側で小笹を持った子ども達が「雨が降っちゃあ そうそうや」と唱えると、神輿を担いだ大人達が「そうえんどうの大ねんぶつ」と応えながら行列が進んでいきます。



宮道天神社の雨乞い祭

## 5 災害にまつわる伝承・記念碑・関連史跡

市内には、災害にまつわる伝承を伝える社寺や、災害に関連する記念碑、また災害に関連する史跡が幾つか所在します。巻末の災害年表右端の関連する中学校区名と合わせて、自宅近くで過去に起こった災害を調べ、災害にまつわる旧跡等を巡ってみてください。



1. 洪水破堤跡
2. 砥鹿神社西参道石鳥居
3. 水屋
4. 霞堤
5. 平和公園
6. 三河国分寺跡
7. 大橋屋
8. 三崎稲荷社
9. 赤坂刑場跡
10. 瘡守神社
11. 海岸復興記念碑
12. 水死者追弔碑
13. 東漸寺

### 【洪水破堤跡】金沢橋北側約 700m 豊川左岸堤防上

昭和 44 年 8 月 7～8 日にかけて、台風 7 号の通過に伴う暴風雨で豊川が決壊し、新城市豊島及び旧一宮町の江島・東上・金沢の各地区 300 余戸が浸水により一時孤立し災害救助法が適用されるといった、豊川流域における戦後最大の洪水が発生しました。現在、復旧した堤防の場所に「昭和 44 年洪水破堤跡」の看板が建てられています。



### 【砥鹿神社西参道石鳥居：市指定】一宮町西垣内（新版豊川の歴史散歩 P276）

国道 151 号に面して建つこの石鳥居は、もとは旧市田村（現諏訪西町二丁目）にあったもので、砥鹿神社奥宮の遥拝所として天保 13 年（1842）に建てられたものです。昭和 20 年（1945）8 月 7 日の豊川海軍工廠の空襲で被災し、戦後、鳥居の修理を機に現在地に移されました。石鳥居をよく見ると、所々に欠けている箇所がありますが、これは豊川海軍工廠の空襲で受けた被弾痕です。



**【水屋】** 当古町・土筒町地内（新版豊川の歴史散歩 P38～39）

当古や土筒などの霞堤地域の集落では、大雨による出水のたびに洪水が押し寄せたため、水の届かない高さまで石垣を積んで、その上に家屋（水屋）を建て洪水の時は避難をしました。最近では、高石垣を積んだ屋敷や蔵はあまり見かけなくなりましたが、土筒神明社や当古秋葉神社といった社寺の敷地や社殿も石垣積みの上に建てられており、戦前の大出水の際には、石鳥居が半分水没するほどの洪水に見舞われました。



土筒神明社の現状



当古秋葉神社の現状

**【霞堤】** 三谷原町ほか（新版豊川の歴史散歩 P39～41）



不連続堤防として築かれた豊川流域の霞堤は、豊川放水路の完成に合わせ豊川右岸については締め切られましたが、今なお市内各地に姿を留め、古川沿いの三谷原町などに往時の雰囲気を残す堤防を今も見ることができます。霞堤が造られたのは、吉田の城下町など下流域を洪水から守るためとも言われ、江戸時代初期には整備が進んでいたと考えられています。

**【平和公園】** 穂ノ原三丁目（平和公園パンフレット）



工場部分だけで 186ha もの敷地を有した豊川海軍工廠は、昭和 20 年（1945）8 月 7 日の米軍の爆撃により壊滅的な被害を受け、その後、豊川市の人口も半減しました。豊川市の誕生及び戦後の再生の基礎ともなった豊川海軍工廠の大空襲の悲劇を忘れないため、跡地にある戦争遺跡（市指定）を保存活用した敷地面積約 3ha の豊川海軍工廠平和公園が、平成 30 年 6 月にオープンしました。公園内には平和交流館が併設され、工廠の歴史や昭和 20 年の空襲被害、また戦後の豊川市の復興の様子を学ぶことができます。

**【三河国分寺跡・国分尼寺跡：国指定】**八幡町本郷・忍地（新版豊川の歴史散歩 P218～223）

国分寺とは、聖武天皇が天平 13 年（741）に発した「国分寺建立の詔」により国分尼寺とともに全国に建てられた寺院で、その頃流行していた疫病（天然痘）や天災・内乱を仏教の力で鎮めることを目的としていました。三河国分寺跡には現在も国分寺の名をもつ曹洞宗の寺院が所在し、北東約 300m の三河国分尼寺跡は、平成 17 年（2005）に史跡公園として整備され、復元した朱塗りの中門・回廊が来園者を迎えてくれます。



**【大橋屋：市指定】**赤坂町紅里（大橋屋パンフレット）

江戸時代の赤坂宿の旅籠建物である大橋屋（旧屋号は鯉屋）は、改修工事を経て平成 31 年（2019）4 月に文化財保存施設として公開が始まりましたが、改修工事に先立つ調査で梁上から降ろされた俵内に収められていた秋葉山の古札が建物内に展示してあります。大橋屋の二階両側には「そでうだつ」と呼ばれる三角形に張り出した壁があり、隣家からの火事が燃え移るのを防ぐ防火壁の機能も果たしていたと考えられます。



**【三崎稻荷社】**赤坂町東裏（音羽の歴史を訪ねて P52～53）

宝永 6 年（1709）の赤坂宿の大火は、宿戸数の約 8 割を焼失するという大惨事となりました。宿役人たちは「家作金拝借」嘆願を幕府と掛け合うため江戸に赴き、その間に保土ヶ谷の三崎稻荷へ日参し、ようやく願いが聞き届けられたことから、その後三崎稻荷の分身を受け、火元となった屋敷跡へ勧請したのがこの稻荷社のはじめとされています。



**【赤坂刑場跡】**赤坂町松本の共同墓地内（音羽町史通史編）

天保 7 年（1836）の加茂騒動の時、赤坂代官所に牢屋を作り、囚人 800～900 人を収容し、首謀者の吟味取り調べが行われましたが、8 人が江戸送りと決まり、うち 4 人が牢屋で首をくくったとされます。赤坂刑場跡には、赤坂牢で獄死した 4 人の 7 回忌に合わせ建てられた「南無妙法蓮華経」の石碑と記念碑があります。



**【瘡守神社】** 御津町赤根（みと歴史散歩 P194～195）

天然痘を擬神化した疱瘡神は悪神の一つとして恐れられ、疱瘡神除けに靈験があると考えられた神社仏閣が各地に点在しています。御津町赤根の瘡守神社もその一つで、明治～大正時代にかけて皮膚病・腫れ物・性病の治る神様としてこの地域で有名となり、明治 19 年（1886）に境内向かって左に参籠殿を建て、おこもりをしながら向かって右にあった浴室で湯治をし、病気が治るとお礼にカワラケを奉納し、花柳界の女性にも人気があったようです。



**【海岸復興記念碑】** 御津町大草（みと歴史散歩 P180）

御津町大草の海岸沿いの御幸浜緑地に渡る大草橋のたもとに海岸復興記念碑があります。昭和 28 年（1953）9 月の台風 13 号の高潮被害により延べ 2,805m の海岸線が大破・決壊しました。その後、鉄筋コンクリート製の護岸工事が行われ、かつて海水浴で賑わった砂浜はなくなりましたが、高潮にも強い海岸堤防が整備され、昭和 34 年（1959）の伊勢湾台風では被害が軽減されました。この記念碑は、海岸堤防の復興を記念して昭和 32 年（1957）10 月に愛知県が建立したものです。



**【水死者追弔碑】** 御津町大草（みと歴史散歩 P181）

明治 22 年（1889）9 月の台風の際、御津町大草周辺では強風と高潮により死者 11 人を数える大きな高潮被害がありました。大草の共同墓地内にある「水死者追弔碑」は、この時亡くなった人の霊を弔うため明治 25 年に建てられたもので、今でも花が捧げられています。

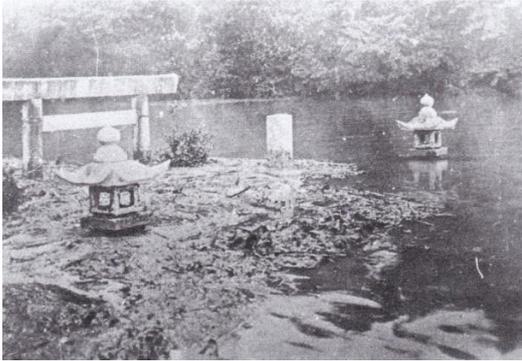


**【東漸寺】** 伊奈町（新版豊川の歴史散歩 P116）

小坂井西小学校の西側にある東漸寺は、寺伝では以前は前芝（現豊橋市）にあったとされます。前芝の東漸寺という真言宗の寺が廃寺となり、延命地藏尊を祀る小堂だけになっていたところ、津波により地藏尊は伊奈の地に流れ着いたため、村人がこれを崇め祀り、第 3 代伊奈城主本多正時（泰次）がお堂を建て本多家の菩提寺としたのが今の東漸寺だと言われています。



## 6 水害アーカイブ写真（今昔对比）



■昭和12年7月大雨による洪水（土筒神明社の冠水写真と現在：神明社入口）



■昭和12年7月大雨による洪水（当古町秋葉神社前の旧姫街道の冠水写真と現在：秋葉神社南）



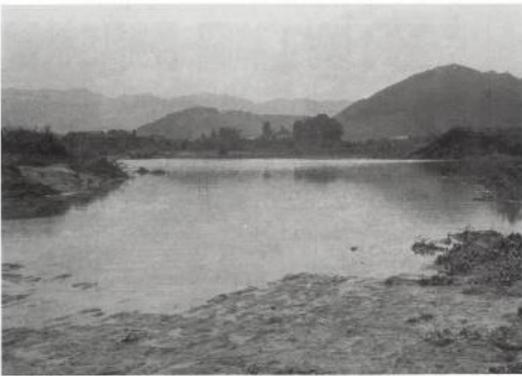
■昭和28年台風13号による高潮被害（御津町大草海岸の大破した堤防と現在の堤防：大草橋付近）



■昭和28年台風13号による洪水（小坂井町旧国道1号の冠水写真と現在：善光寺川万石橋付近）



■昭和 38 年 5 月大雨による音羽川の堤防崩落（国府町南田橋西右岸の修復作業写真と現在）



▲ ③ 本川左岸堤の決壊（宝敷郡一宮町金沢）

■昭和 44 年台風 7 号による豊川堤防の決壊（堤防決壊状況と現在：金沢橋北約 700m）



■昭和 49 年七夕豪雨による白川の決壊（市田町出口橋北側右岸の決壊状況と現在：出口橋北）



■昭和 49 年七夕豪雨による御津川の決壊（御津中北側の御津川左岸の決壊状況と現在：御津中北）

■豊川市災害年表

西暦	和暦	種別	被害状況 ※【 】内は記事対象中学校区名略称	参考文献
2万7千～2万4千年前		噴火	鹿児島湾北部の始良カルデラを噴出源とする始良火山灰が市域にも降灰（平成4年12月の八幡町亀ヶ坪の交差点改良工事の際に厚さ8～10cmの火山灰層が確認された）。【中中】	新市史
約6千3百年前		噴火	薩摩半島南沖の鬼界カルデラを噴出源とする鬼界アカホヤ火山灰が市域にも降灰（始良火山灰堆積層の上層から鬼界アカホヤ火山灰由来の火山ガラスが確認された）。【中中】	新市史
約2,250年前		洪水	弥生時代中期に米作りのため沖積低地にも集落が進出したことから洪水との戦いがはじまる。【坂中】	新市史
684/10/14	天武13	地震	白鳳南海地震。一宮市田所遺跡の発掘調査で、この頃と推定される液状化現象（噴砂痕）が確認されている。	日本書紀
701/8/21	大宝元	風害	三河等17か国で蝗害が発生し、大風が吹き家屋が損壊し、秋の収穫にも影響があった。	続日本紀
706/閏1/5	慶雲3	疫病	京や三河などの国々で疫病が流行したので医師や薬を送って治療させた。	続日本紀
710/4/29	和銅3	飢饉	三河・遠江・美濃の三国が飢饉になったのでものを恵み与えた。	続日本紀
713/11/1	和銅6	風害	尾張国・三河国等で大風が吹いて秋の収穫に影響があった。	続日本紀
715/5/26	靈龜元	地震	三河国で地震があり正倉47棟が倒壊、人民の廬舎（粗末な建物）も方々で陥没した。	続日本紀
762/3/29	天平宝字	干ばつ	三河国・尾張国・遠江国など9か国で日照りがあった。	続日本紀
765/3/4	天平神護	干ばつ	三河国など5か国で日照りがあった。	続日本紀
773/3/17	宝亀4	風害	三河国で大風が吹いて人民が植えたのでものを恵み与えた。	続日本紀
823/7/10	弘仁14	干ばつ	三河国・遠江国で日照りがあった。	類聚国史
838/7~9月	承和5	噴火	7月5日に伊豆の神津島が噴火、三河国を含む16か国で火山灰が降り、何日も止まらなかった。	企図録
857/6/6	天安元	地震	三河国から朝廷に国庁の東庫が振動したとの報告があった（災害ではなく凶兆の記録かも）。	企図録
874/11/27	貞観16	風水害	三河国で秋に風水害がおこった。	企図録
887/7/30	仁和3	地震	仁和南海大地震。東海地方の遺跡調査でも、この頃の地震痕跡が見つかっている。	企図録
1096/11/24	永長元	地震	永長東海大地震。伊勢国阿乃津（三重県津市）ほか駿河国から伊勢国沿岸にかけて津波が襲った。	企図録
12世紀後半頃		洪水	為当の為当条里遺跡の発掘調査で12世紀後半頃の音羽川の氾濫によるものと推定される洪水性の砂層に覆われる埋没条里遺構が検出され、水田の再生が容易にできなかったことが推測された。【西中】	発掘調査報告書
1498/8/25	明応7	地震	明応東海大地震。伊勢・三河・駿河・伊豆を大津波が襲い数千人が死亡。この津波で浜名湖が海とつながったとされる。	企図録
1498	明応7	水害	豊川の流路が変わり現在の古川がこの時にできた新流路となる（以降文禄4年まで古川筋が豊川の本流）。	企図録
1540/8	天文9	高潮等	暴風雨・高潮で御馬や伊奈では大きな被害を受ける。伊奈の東漸寺は前芝（豊橋市）に所在していたが、この時の高潮で流され、現在地に移されたという。【御津中・坂中】	企図録
1595/8	文禄4	洪水	大洪水で豊川の流路が古川筋から現在の河道に変わる。三波野村（三上）の飛龍大明神と飛龍大権現では帳面類が流された（両社は、天文2年（1533）に津波で上流の賀茂まで流されたとの言伝もあり）。【東中】	企図録
1600	慶長5	洪水	国府の露食山下に所在した長泉寺が、大水で国府字青馬に移転した。【西中】	企図録
1609/4/4	慶長14	火災	この夜御油で大火がありことごとく焼失した。【西中】	県災誌
1609	慶長14	火災	赤坂宿で大火あり、十王堂付近から出火した。【音中】	音町史
1610か	慶長15	水害	ちのふ河原の西、井之島村（豊津）の北に新川（豊川の新流路）が生じた。【一中】	企図録
1611/1/10	慶長16	火災	宝飯郡御油が焼失した。【西中】	県災誌
1614/8/6	慶長19	竜巻	大風雨のさ中に竜巻が発生。吉田城下で町屋などを吹き飛ばし、その後牧野で11軒を吹き飛ばし、赤根でも11軒を吹き飛ばした。【東中・御津中】	企図録
1621	元和7	干ばつ	日照りが続き、本宮山において雨乞いを行った。【一中】	企図録
1622/8/14	元和8	洪水	洪水で豊川が氾濫し、井之島村（豊津）では2戸を残してことごとく流失し村社も流失した。【一中】	企図録
1636/8/4	寛永13	高潮	高さ一丈余の高潮で御馬では20戸を残しその他の家は流され、人馬の死亡80余りを数えたとされる。平井の延命寺でも由緒書を流失した。【御津中・坂中】	企図録
1640	寛永17	疫病	この年三河で疫病が流行し多数の死者が出た。	三河国聞書
1642	寛永19	飢饉	この年三河では飢饉により餓死者多数。疫病も流行した。	三河国聞書
1660/7/29	万治3	水害	下佐脇で洪水となり田畑に被害が出た。【御津中】	企図録
1660	万治3	高潮	御馬で高さ2～3尺の高潮がおこり、潮除堤（防潮堤）が破損した。【御津中】	企図録
1669	寛文9	火災	八幡の西明寺が火災により本堂や山門などを焼失した。【西中】	新市史
1680/閏8/6	延宝8	風水害	暴風雨で御馬では4尺の高潮がおこり潮除堤が破損。浸水で東海道が通行できなくなり小坂井と船町（豊橋市）の間が船渡しとなったほか、大風で豊川御林では松が157本倒れ、麻生田では豊川の氾濫があった。【御津中・坂中・東中】	企図録
1681	天和2	飢饉等	この年の春三河では飢饉が続き餓死者多数。夏にも疫病が流行した。	三河国聞書
1691/5	元禄4	洪水	橋尾で豊川の堤防が決壊したため賀茂（豊橋市）と井之島村（豊津）との間に新川が生じた。【一中】	企図録
1697/8/5	元禄10	風水害	大風雨のため豊川村で農作物に被害があり、農家12軒が破損、3軒が倒壊した。【東中】	企図録
1699	元禄12	洪水	長沢の谷下川が洪水で決壊した。【音中】	企図録
1700	元禄13	洪水	長沢の谷下川が洪水で決壊した。【音中】	企図録
1702	元禄15	洪水	御油で音羽川が満水となりため池の堤防が壊れた。【西中】	企図録
1705/6/27～28	宝永2	洪水	暴風雨で宝川で堤が切れた。【一中】	企図録
1707/10/4	宝永4	地震	宝永大地震。紀伊半島の東側と西側が同時に震源域となり伊豆半島から四国までの沿岸を津波が襲った。下佐脇では津波により田畑に被害、御油・赤坂では東海道の板橋や土橋が少し壊れた。また地震と津波により新居・舞坂間の渡航が困難となり、本坂通（姫街道）の交通量が増加した。【御津中・音中・西中】	企図録
1709/11/5	宝永6	火災	赤坂宿の戸数360戸のうち約8割にあたる280戸を焼失する大火があった。その後、火元となった屋敷跡に保土ヶ谷（神奈川県）の三崎稲荷の分身を受け三崎稲荷社が建立される。【音中】	音町史
1711/8/23	正徳元	風水害	大風で本宮山の松が千本余り倒れ、御馬では高さ4尺余の高潮により死者4名・142戸全壊の被害があり潮除堤（防潮堤）も破損した。【一中・御津中】	企図録
1711/6	正徳2	干ばつ	日照りが続き、6月28日に本宮山において雨乞いを行った。【一中】	企図録
1715/6	正徳5	洪水	豊川の洪水で楽筒村・楠木村地内（二葉）の囲堤が決壊し、一時的な流路（今川）が生じた。【東中】	企図録
1716	享保元	疫病	この年三河で疫病が流行し死者多数が出た。	三河国聞書
1717	享保2	火災	大木の玉宝寺より出火し、村の大半を焼失した。【一中】	一町誌
1718/9/12	享保3	高潮	御馬では高さ3尺の高潮が押し寄せ潮除堤（防潮堤）が切れ行方不明者も出た。【御津中】	企図録
1722	享保7	洪水	長沢の谷下川が洪水で決壊した。【音中】	企図録
1728/5～8	享保13	洪水	たび重なる豊川の洪水で、東上では堤防などに被害があった。【一中】	企図録
1734/8/7	享保19	洪水	豊川の洪水で楽筒村（二葉）の堤防が480間（約870m）にわたって決壊した。【東中】	企図録
1735/6/21	享保20	洪水	大雨により北金屋で洪水被害、当古の古川（豊川の旧河道）も豊川本流のような水勢だった。【金中・東中】	企図録
1735	享保20	洪水	御油では音羽川がたびたび氾濫して東海道の通行にも支障が生じたほか長沢の谷下川でも洪水がおこった。【西中・音中】	企図録
1736	元文元	疫病	前年から本年春にかけて三河で瘧疾が流行した。	三河国聞書
1736	元文元	洪水	長沢の谷下川で洪水がおこり、音羽川も氾濫した。【音中・西中】	企図録・新市史
1737	元文2	洪水	長沢の谷下川で洪水がおこった。【音中】	企図録

西暦	和暦	種別	被害状況 ※【 】内は記事対象中学校区名略称	参考文献
1738/4/19~20	元文3	洪水	御油では音羽川の洪水で堤防が破損し東海道の橋も破損した。【西中】	企図録
1739/9/1	元文4	洪水	御油では洪水で用水路の圍堤が切れた。【西中】	企図録
1740/8/15	元文5	洪水	宝川が氾濫し上長山の松源院の客殿が浸水した。【一中】	企図録
1742	寛保2	洪水	悪水で市田の川堤が切れた。【中中】	企図録
1746/7/13	延享3	雷	正岡で落雷により死者1名。【南中】	企図録
1747/11/23	延享4	火災	赤坂宿で大火。地藏堂町が残らず焼失した。【音中】	音町史
1754/8/8	宝暦4	洪水	東上の井堰6か所が洪水で壊れた。【一中】	企図録
1756	宝暦6	洪水	大水で赤坂の東海道の土橋が壊れた。【音中】	企図録
1757/5/1~5	宝暦7	洪水	大雨で下長山・牛久保で人家に浸水があった。【南中】	企図録
1758/6~8	宝暦8	干ばつ	日照りが続き本宮山で雨乞いを行ったところ8月7日にやっと雨が降った。【一中】	企図録
1759/6/7	宝暦9	洪水	大雨で楽筒村(二葉)において豊川の修理中の堤防が破損した。【東中】	企図録
1759/6/21	宝暦9	洪水	豊川の洪水で三渡野村(三上)・当古村では家屋が流失し溺死者93名を数えた。下地(豊橋市)でも豊川の堤防が切れ小坂井まで氾濫水が押し出し東海道は水が引くまで船渡しとなった。【東中・南中・坂中】	企図録
1759/7	宝暦9	洪水	7月8日・13日・17日と続いた大水で豊川の堤が壊れ三上で洪水被害があった。【東中】	企図録
1760/2/18	宝暦10	火災	宝飯郡豊川村で火事、焼失家屋15軒を数えた。【東中】	県災誌
1761	宝暦11	干ばつ	下佐脇・下長山で干ばつ被害があった。【御津中・南中】	企図録
1762	宝暦12	干ばつ	上佐脇・下佐脇で干ばつ被害があった。【御津中】	企図録
1770/6~8	明和7	干ばつ	日照りにより市内各所で干ばつ被害あり、本宮山で大雨乞いを行った。【一中】	企図録
1771/5	明和8	干ばつ	下佐脇で干ばつ被害あり、砥鹿神社で大雨乞いを行った。【御津中・一中】	企図録
1779/10/1~2	安永8	噴火	桜島の大噴火により財貨で厚さ2~3分(6~9mm)の降灰があった。【中中】	企図録
1780/7~8	安永9	洪水	大風雨による二度の洪水で為当では音羽川の堤防などに被害があった。【西中】	企図録
1783/7/7~8	天明3	噴火	浅間山で噴火。7月7日と8日に財貨で浅間山の噴火爆発の音が聞こえた。【中中】	企図録
1787/3/16~21	天明7	洪水	東上で谷川が増水し鳳来寺道にかかる土橋が流出した。【一中】	企図録
1790/11/23	寛政2	火災	赤坂宿で大火。関川町が焼失した。【音中】	音町史
1791/4	寛政3	洪水	大雨で鶴岡嶋村・江村(江島)の堤防が壊れ、松原の若宮天王宮が社殿を残して建物が流失する等の被害があった。【一中】	企図録
1793/7/24	寛政5	洪水	大洪水で松原の豊川の堤防が数百間の範囲で決壊した。【一中】	企図録
1793/8/22	寛政5	洪水	御油で音羽川が増水し御油橋が落ちた。【西中】	企図録
1801/7/20	享和元	洪水	西古瀬川と白川が増水し、白鳥で西古瀬川の堤防が切れ、白鳥・小田淵に被害があった。【中中・代中】	企図録
1802/6/29	享和2	洪水	大雨で小田淵と白鳥及び小坂井で東海道が冠水し一時通行できなくなった。【代中・中中・坂中】	企図録
1802	享和2	火災	妙厳寺(豊川稲荷)で火災、多くの建物が焼失した。【東中】	新市史
1803/8/16	享和3	洪水	大雨で小田淵と白鳥の東海道が冠水し一時通行できなくなり彦根藩の飛脚が足止めされた。【代中】	企図録
1807/8	文化4	風害	大風で小田淵の稲荷社の木が12本根返りした。【代中】	企図録
1808/7/24~25	文化5	風水害	暴風雨により砥鹿神社や財賀寺、牛久保、小田淵稲荷社などで倒木・建物被害があり、小田淵では東海道の松並木も倒木した。御馬では西南の上ヶ浜で高潮被害があった。【一中・中中・南中・代中・御津中】	企図録
1809/4	文化6	火災	赤坂に大火があり、赤坂宿の旅館屋の多くが焼失した。【音中】	音町史
1812/5/27~28	文化9	洪水等	大雨で本宮山や財賀の各所で土砂崩れがあり、豊川や宝川、音羽川でも洪水被害があった。【一中・中中・西中】	企図録
1816/閏8/4	文化13	風水害	大風雨で砥鹿神社の社木に被害があり、下佐脇では田畑に冠水被害があった。【一中・御津中】	企図録
1817/6	文化14	洪水	大風雨により大崎で野水の被害があった。【金中】	企図録
1819/5/13~14	文政2	洪水	御油で音羽川が満水となり堤防に被害があった。【西中】	企図録
1827	文政10	土砂	赤坂で山崩れがおこり田が土砂に埋まった。【音中】	企図録
1828/6	文政11	洪水	御馬で音羽川の堤防が切れた。【御津中】	企図録
1828/6/30~	文政11	洪水	暴風雨で松原・向河原・楠木(二葉)・瀬木等で豊川の堤防が切れた。下佐脇では音羽川が満水となり田畑が冠水した。【一中・東中・御津中】	企図録
1829/7/17~18	文政12	洪水	風雨により松原では堤防が切れた。【一中】	企図録
1833/10/28	天保4	火災	御油で大火があり被災およそ100戸。本陣2軒も焼失した。【西中】	県災誌
1835/6/29~30	天保6	洪水	豊川の出水で橋尾で被害があり、また赤坂宿では音羽川の用水井堰が洪水で被害があった。【一中・音中】	企図録
1835/閏7/6	天保6	洪水	大風雨で豊川が氾濫し各所に冠水被害があった。	企図録
1836/8/13	天保7	風水害	暴風雨により一宮・西方・小田淵等で倒木、家屋倒壊などの被害があったほか、御馬では高さ3尺(0.9m)の高潮で潮除堤が損壊、御馬湊にも被害があり、小田淵の東海道の松大小5本が根返りし通行不能となった。【一中・御津中・代中】	企図録
1836/9	天保7	飢饉	暴風雨や降り続く雨のためこの年は凶作になり、飢饉がますます深刻となり、9月に現豊田市域で加茂騒動(一揆)が起こる。岡崎・拳母藩の出兵により鎮圧され、赤坂代官所にて吟味取り調べがあり、赤坂に牢屋を作って囚人8~9百人を収容した。はんだ橋近くの墓地に獄死者の「南妙法蓮華経」の碑が立っている。【音中】	音町史
1837/8	天保8	洪水	大風雨のため豊川が満水となり、市内各所で風水害があり、御馬では高潮が起こった。【御津中】	企図録
1840/6/27~30	天保11	洪水	豊川が出水し橋尾では豊川の堤防などが決壊し田畑が冠水した。【一中】	企図録
1844/4/30	天保15	雷	養父村(金沢)で雷鳴とともに金柑大の雹(ひょう)が降り、木綿栽培に被害があった。【一中】	企図録
1845/5/11	弘化2	洪水	大風と出水で赤坂宿の東海道の土橋が流失し通行できなくなった。【音中】	企図録
1847/3/24	弘化4	地震	善光寺地震発生。7年に一度の御開帳で善光寺参りの参詣者が多く地震に巻き込まれた。旧一宮町域からの参詣者にも死者が出たことが記録で確認できる。【一中】	企図録
1849/8/2~3	嘉永2	洪水	大雨で豊川が出水し松原の堤防が切れ、小坂井でも洪水で東海道が終日通行できなくなった。【一中・坂中】	企図録
1850/7/21~22	嘉永3	洪水	暴風雨で豊川の堤防が松原をはじめ各所で切れ、市内各所に冠水被害が出た。【一中・東中・南中・坂中】	企図録
1851/8/25~26	嘉永4	洪水	大雨による洪水で豊川の堤防が各所で切れ冠水被害が出た。【東中】	企図録
1854/11/4	安政元	地震	安政東海地震(翌日には安政南海地震も発生)。伊豆半島から紀伊半島までの沿岸を津波が襲った。御馬・小坂井・篠束等で地盤沈下や家屋倒壊の被害があり、小坂井では津波が東海道まで繰り返し押し寄せ、御馬湊では船積前の米俵が流された。豊川稲荷の石灯籠もいくつか倒れた。【御津中・坂中・東中】	企図録
1855/3/29	安政2	火災	牛久保で大火があり、下町から中町にかけ37戸(68棟)を焼失した。【南中】	新市史
1855/7/26~27	安政2	洪水	大風雨で豊川が出水し、松原等各所で堤防が切れ、篠束まで氾濫水が押し寄せた。【一中・東中・南中・坂中】	企図録
1857/4/27	安政4	洪水	洪水で瀬木で橋が1か所落ちた。【東中】	企図録
1859/5/29	安政6	洪水	大雨による洪水で御馬で音羽川の堤防が壊れた(安政東海地震で地盤沈下があった個所)。【御津中】	企図録
1860/5/10~11	万延元	洪水	大風雨で豊川が出水し松原をはじめ市内各所で堤防が切れ各所で冠水被害があった。小坂井の東海道も冠水し一時通行ができなくなった。【一中・東中・南中・坂中】	企図録
1861/2/13	文久元	地震	三河・飛騨に強震があり、豊川稲荷の石灯籠が転倒し土塀が崩れたほか、御油宿では本陣2軒を含め36軒の家屋に被害があった。【東中・西中】	企図録

西暦	和暦	種別	被害状況 ※【 】内は記事対象中学校区名略称	参考文献
1868/8/6	慶応4	洪水	豊川が出水し橋尾から向河原までの堤防が切れ家屋3軒が流失し死者1名が出た。その他の川筋でも所々で堤防が切れた。【一中・東中】	企図録
1870/8/7~8	明治3	風水害	大風雨で豊川が出水し、所々で堤防が切れた。東海道の並木の松も多数倒れた。	企図録
1870/9/7~8	明治3	風水害	暴風雨で豊川水系が氾濫して大水害となった。	県災誌
1871	明治4	火災	一宮の宮前の大火により47戸を焼失した。【一中】	一町誌
1875/10	明治8	洪水	豊川が増水し、松原の堤防が渡船場下で決壊した。【一中】	母豊川
1876/8/4	明治9	洪水	豊川増水により橋尾地先の堤防が決壊した。【一中】	母豊川
1877/5	明治10	火災	上長山分学校が全焼した(安盛院)。【一中】	一町誌
1881/11	明治14	風害	大風により長沢東校舎が倒壊した。【音中】	音町史
1885/2/3	明治18	火災	赤坂中央部で21戸(棟数50)焼失の火災があった。【音中】	音町史
1889/9/11	明治22	高潮等	台風の通過により県下全般で暴風雨となり三河湾・伊勢湾に高潮が発生。御津町の沿岸部も高潮の被害を受け、その後大草では11名の死者を挙げた「水死者追弔碑」が建てられた。豊川も増水し、橋尾・二葉・三上の堤防が決壊した。【御津中・一中・東中】	御町史・一町誌
1891/10/28	明治24	地震	濃尾地震。揖斐川上流域を震源とするM8.0の大地震により岐阜県・愛知県を中心に各地で被害甚大。宝飯郡下では死者1名、負傷者5名、住家全壊12戸、半壊49戸の被害があった。	県災誌
1892/6/19	明治25	土砂	大雨で上長山で山崩れがあり家屋1棟半壊・負傷者1名、県道わきの山崩れで1人が死亡した。【一中】	県災誌
1892/9/4	明治25	洪水等	県下全般に暴風雨となり宝飯郡下でも負傷者6名、住家全壊415棟を数えた。	県災誌
1893/8/17~18	明治26	洪水	台風の通過により暴風雨となり一宮地内の霞堤ほか豊川の各所で破堤し豊川関係で死傷者12名を数える被害があった。【一中】	県災誌・一町誌
1896/9/4~11	明治29	洪水	大雨により県下各所で中小小川が氾濫し宝飯郡下でも死者1名住家半壊1戸等の被害があった。	県災誌
1897/6/16~17	明治30	洪水	大雨により音羽川が出水し橋の落ちた所が数か所あった。	県災誌
1897/9/8~9	明治30	洪水	台風の通過による暴風雨で豊川が出水し橋尾・三上で堤防が決壊、音羽川でも各所で堤防が決壊し国府の町が浸水した。【一中・東中】	県災誌・豊川史話
1897/9/29	明治30	洪水	台風の通過による暴風雨で豊川が出水し橋尾で堤防が決壊、家屋の被害は50余戸に及んだ。【一中】	県災誌
1898/6/4~5	明治31	洪水等	大雨により音羽川の堤防が御油等で決壊し国府の町は全町浸水、駅前周辺の最も深い所で1.5mに達した。赤坂・長沢・八幡・御津では山崩れも発生した。【西中・音中・中中・御津中】	県災誌・豊川史話
1898/9/6~7	明治31	洪水等	台風の通過で東三河地方一帯で暴風雨となり豊川が松原・橋尾・三上・睦美・明子(行明・柑子)等で決壊、音羽川も御油・国府で破堤し大きな被害あり。宝飯郡下では死者4名・住家流出23戸・全壊110戸・半壊150戸の被害があった。【一中・東中・南中・西中】	県災誌
1901/12/25	明治34	竜巻	宝飯郡南部に竜巻が発生。平井から伊奈・桜町・八幡にかけ延長7.5kmに及び、死者2名、負傷者12名、建物全壊14棟を数え、特に桜町~八幡にかけ被害がひどかった。【坂中・代中・中中】	県災誌
1903/7/9	明治36	竜巻	集中豪雨で音羽川が御油等で破堤するとともに、宝飯郡南部で竜巻が発生。蒲郡市大塚から御津町大草・広石をぬけ御油・萩にかけ延長8kmに及び、死者2名、負傷者3名、家屋全壊10棟を数える被害があった。【西中・御津中・音中】	県災誌
1904/7/9~10	明治37	洪水等	台風の通過で県下全般で暴風雨となり豊川の石田観測地点では過去最高の水位(9.06m)を観測。豊川は各所で堤防が決壊し、宝飯郡下でも死者5名、住家全壊104戸を数える被害があった。また新城市四谷地区では大規模な山崩れにより死者11名、家屋流失6戸、家屋全壊5戸等の被害があった。【一中・東中】	県災誌
1905/6/10~14	明治38	洪水	大雨で豊川が増水し三上・柑子等で堤防が決壊した。音羽川も御油・国府等で堤防が決壊し、西古瀬川も氾濫して小田渚で東海道が浸水し通行止めとなった。【東中・南中・西中・代中】	県災誌・豊川史話
1906/7/10~16	明治39	洪水	大雨で音羽川が増水し御油・国府で堤防が決壊した。【西中】	県災誌
1907/7/10~12	明治40	洪水	大雨で豊川が増水し牛久保・下地の堤防が破損、一宮の二重堤防が決壊、音羽川では国府・御油ほか堤防が決壊した。【南中・一中・西中】	県災誌
1907/8/15	明治40	風水害	台風の通過により暴風雨となり伊勢湾・三河湾に高潮が発生し県下全体で死者19名住家全壊166戸、堤防決壊85か所に及び被害があった。萩では改築中の校舎が倒壊した。【音中】	県災誌
1908/8/7	明治41	洪水	台風の通過により暴風雨となり豊川堤防が各所で破損・決壊した他、音羽川・白川・西古瀬川等の小川川の堤防も各所で決壊した。【東中・中中・西中・御津中】	県災誌
1910/8/7~10	明治43	洪水	大雨で豊川が氾濫し当古付近から大村(豊橋市)一帯が浸水。豊川町や八幡で中小小川の破堤の被害もあった。【東中・中中】	県災誌
1911/6/19	明治44	風水害	台風の通過により県下全般に暴風雨となり、宝飯郡下で全壊24戸、半壊10戸、死者2名の被害があった。	県災誌
1911/8/4	明治44	洪水等	台風の通過により県下全般に暴風雨となり、豊川が氾濫して下郷のほとんどが冠水したほか、音羽川では豊成橋が流失し、佐奈川・古川が各所で決壊し、豊川駅のプラットホームも破壊されるなどの被害があった。【東中・南中・西中・坂中】	県災誌・豊川史話
1912/8/24	大正元	竜巻	この日西三河と東三河沿岸部でそれぞれ竜巻が発生。後者は豊橋市の老津から海上を経て前芝・小坂井・国府を抜け八幡に進み延長約12km。小坂井・国府で住家全壊6棟の被害があった。【坂中・西中・中中】	県災誌
1915/8/5	大正4	竜巻	一宮村長山駅付近で竜巻が発生し、豊川の水を巻き上げながら東上駅方面へ向かった。【一中】	一町誌
1917/7/6~7	大正6	洪水	大雨により豊川が増水し一宮村で堤防が切れ被害があった。【一中】	県災誌
1919/4/19	大正8	火災	一宮の宮前で火災、強風のため8戸14棟を焼失した。【一中】	県災誌
1920/9/16	大正9	洪水	台風の通過による暴風雨で宝飯郡下で住家80戸が全壊、下郷の多くが浸水するなどの被害があった。	県災誌
1921/5/	大正10	火災	本宮山山林の大火。約20haを焼失した。【一中】	一町誌
1922/5/22	大正11	火災	豊川停車場通りから出火、全焼23戸、半焼9戸、負傷者6人の被害があった。【東中】	県災誌
1922/7/1~4	大正11	洪水	大雨で豊川・音羽川の堤防が決壊し各所に浸水被害があった。【西中】	県災誌
1923/1/1	大正12	火災	下長山で火災、1人焼死、26戸が全焼した。【南中】	県災誌
1923/6/8~9	大正12	洪水	大雨で豊川等の堤防が破堤し宝飯郡下では死者2名住家全壊2戸等の被害があり、当古一帯が浸水。【東中】	県災誌
1923/6/22	大正12	洪水	台風の通過による大雨で豊川の下流域では最大級の洪水(土筒の祐林寺資料では洪水位7.2m)が発生した。【一中・東中・南中・坂中】	新市史
1924/2/23	大正13	火災	牛久保中町で火災、全焼7戸9棟、半焼4戸を焼失した。【南中】	県災誌
1925/9/11	大正14	風水害	台風の通過による暴風雨で豊川の堤防が破堤氾濫したり国府の県立高等女学校校舎が倒壊するなどの被害があった。【西中】	県災誌
1926/9/4	大正15	風水害	台風の通過による暴風雨で宝飯郡下の下地(現豊橋市)の津田小学校校舎が授業中に倒壊し死者14名負傷者51名を出す大惨事となった。また音羽川など小川川も出水した。	県災誌
1926/11/1	昭和元	火災	松原で大火があり全焼6軒を含む16軒が焼失した。【一中】	一町誌
1928/8/30	昭和3	竜巻	九州・中国地方の台風通過による不安定な大気により北金屋及び八幡方面で竜巻が発生し住家1棟非住家3棟に被害があった。【金中・中中】	県災誌
1930/3/18	昭和5	火災	篠田の区有林から出火、5haが焼失した。【一中】	県災誌
1930/7/31	昭和5	洪水	豊川が記録的な出水となり下郷一帯が冠水し豊川鉄道車両が土砂崩れに衝突し車両前方が大破した。【東中・南中】	新市史
1935/2/8	昭和10	火災	上長山の山林から出火、約150haが焼失した。【一中】	県災誌
1937/2/22	昭和12	火災	御油の遠見御料地から出火、約5haが焼失した。【西中】	県災誌

西暦	和暦	種別	被害状況 ※【 】内は記事対象中学校区名略称	参考文献
1937/7/13~15	昭和12	洪水	梅雨前線による大雨で記録的な降水量があり、土筒や当古は広く冠水し、宝飯郡下全体で床上浸水300戸、床下浸水669戸の被害があった。【東中】	県災誌
1940/5/6	昭和15	火災	国府町流霞の民家から出火。西風におおられて28戸、58棟が全半焼した。【西中】	
1941/11/28	昭和16	竜巻	寒冷前線の通過により豊橋市大崎から牛川にかけ8kmにわたり竜巻被害あり。豊川市域には及ばなかったが、豊橋市内で死者12人・重傷者30人・全壊家屋44戸を数えた。	県災誌
1944/12/7	昭和19	地震	昭和東南海地震。熊野灘を震源としたM7.9の巨大地震で、被害は静岡・愛知・三重県を中心に発生し、熊野灘沿岸に津波が押し寄せ、地震・津波による死者は1,183人と報告されている。豊川市では住家全壊7戸、半壊29戸の被害があった。	県災誌・新市史
1945/1/13	昭和20	地震	三河地震。愛知県東部を震源とするM6.8の地震が発生し、現在の幸田町や蒲郡市形原町を中心に大きな被害があった。死者は2,300人余りとされ、この地震に伴い地表に断層が現れる（幸田町や蒲郡市の深溝断層）。豊川市域では幸い目立った被害はなかった。	県災誌
1945/8/7	昭和20	空襲	米軍のB29爆撃機による空襲で豊川海軍工廠が壊滅的な被害を受け、工員や女子挺身隊、動員学徒の若者ら2,500名以上が命を落とした。【代中・金中・中中】	新市史
1946/12/21	昭和21	地震	昭和南海地震。紀伊半島沖を震源とするM8.0の地震が発生し、紀伊半島から四国太平洋沿岸を津波が襲ったが、豊川市域では被害はなかった。	県災誌
1951/3/7	昭和26	火災	諏訪の引揚者収容施設豊川寮の火災で2棟を全焼し、海外引揚者60世帯が罹災した。	新市史
1953/7/18	昭和28	洪水	豪雨により蔵子・八幡・牛久保・豊川北部・陸美の各所で冠水被害があった。【代中・中中・南中・東中】	新市史
1953/9/25	昭和28	高潮等	台風13号の通過により県下全域が暴風雨となり、伊勢湾・三河湾沿岸では高潮被害が著しく災害救助法が適用された。旧御津町の沿岸では石積みの海岸堤防が延長2805mにわたって決壊・大破し、建物全壊30戸、半壊132戸、流失16戸、床家浸水271戸の被害があった。【御津中】	県災誌
1954/8/15	昭和29	洪水	台風5号により院之子で差し水による大水が発生した。【東中】	新市史
1954/8/18	昭和29	竜巻	台風5号の通過に伴い御津町西方で竜巻が発生し、住家・非住家それぞれ1棟が倒壊した。【御津中】	県災誌
1954/9/18	昭和29	洪水	台風14号により院之子で差し水による大水が発生した。【東中】	新市史
1955/7/16	昭和30	火災	古宿の農機具工場から出火、工場9棟を全焼し付近民家17戸を全半焼した。【東中】	県災誌
1956/9/9	昭和31	竜巻	国府高校の校庭で竜巻が発生し北西に進み国府駅北方で消滅、住家一部破損15棟、非住家全壊3棟の被害があった。【西中】	県災誌
1956/9/26	昭和31	竜巻	御津町下佐脇で竜巻が発生して北に1.5km程進み、小田淵付近で家屋倒壊の被害があった。【御津中・代中】	県災誌
1956/9/27	昭和31	洪水	台風15号による豪雨で古川が逆流し大水発生。院之子・土筒・当古・二葉・三上の田畑が冠水し姫街道も通行不能となった。【東中】	新市史
1958/8/26	昭和33	洪水	台風17号により下郷（当古・土筒・院之子）で豊川の差し水による大出水があり作物が甚大な被害を受けた。【東中】	新市史
1958/12/26	昭和33	突風	低気圧が発達し北金屋で突風があり木造2階建てアパートが倒壊した。【金中】	県災誌
1959/9/26	昭和34	風水害	台風15号（伊勢湾台風）の影響で県下全域が暴風雨となり、伊勢湾沿岸では高潮被害が著しく災害救助法が適用された。豊川市周辺では鉄筋コンクリート製の沿岸堤防の整備により高潮被害は免れたが、暴風による家屋損壊の被害が大きく、市域でも死者2名、住家全壊189棟を数えたほか、院之子では全戸が床上浸水となった。	県災誌・新市史
1961/6/27	昭和36	洪水	台風6号による豪雨で院之子で大水が発生したほか、市田の白川右岸や佐奈川が決壊した。【東中・中中】	新市史
1962/7/2	昭和37	洪水	集中豪雨により市田・諏訪・国府・牛久保・桜町・院之子で浸水被害があった。【中中・西中・南中・代中・東中】	新市史
1962/7/2	昭和37	洪水	大雨で大木で帯川の堤防が決壊したほか、白川が決壊し、院之子も浸水被害があった。【一中・中中・東中】	新市史
1962/7/28	昭和37	洪水	台風7号により院之子・土筒・当古・三上で浸水被害があり、白川が決壊した。【東中・中中】	新市史
1963/5/17	昭和38	洪水	豊川の増水と満潮が重なり下郷と三上で大水が発生。姫街道や田畑が冠水した。また音羽川右岸崩壊、西古瀬川溢水。【東中・西中・中中】	新市史
1965/5/21	昭和40	洪水	旧一宮町内で大雨による増水中の豊川に登校中の学生が転落し行方不明者1人。【一中】	県災誌
1965/9/7	昭和40	洪水	台風24号の通過による暴風雨で新城市豊島地内で豊川堤防が決壊し下流の耕地が冠水した。【一中】	県災誌
1966/10/12	昭和41	洪水	ニツ玉低気圧の通過により東三河地方が大雨となり豊川市内でも浸水被害や停電があった。豊橋市では朝倉川が氾濫して民家に取り残された住民3名と豊橋警察署の警官5名を乗せた救助艇が救助の帰路に転覆して7名の犠牲者が出た。	県災誌
1969/6/7	昭和44	洪水	集中豪雨で赤坂の天王川が決壊した。【音中】	音町史
1969/8/4~5	昭和44	洪水	台風7号の通過に伴う暴風雨で豊川が決壊し新城市豊島、旧一宮町江島・東上・金沢の各地区300余戸が浸水により一時孤立し災害救助法が適用された。【一中】	県災誌
1969/12/7	昭和44	竜巻	豊橋市西橋良から下地・大村にかけて竜巻が発生。豊川市域には及ばなかったが、豊橋市では死者1人・重傷12人・住家全壊10棟・半壊46棟の被害があった。	県災誌
1971/8/30~31	昭和46	洪水	台風23号による大雨で旧音羽町で軽傷者1人、旧音羽町と御津町で住家半壊5棟、豊川市及び宝飯郡下で床上浸水78棟、床下浸水1,060棟の被害があった。【音中・御津中】	県災誌
1972/9/16~17	昭和47	風水害	台風20号による暴風で豊川市で軽傷者1人、旧小坂井町で住家半壊4棟、旧御津町で床下浸水13棟の被害があった。【坂中・御津中】	県災誌
1974/7/7	昭和49	洪水	七夕豪雨。台風8号による集中豪雨で東三河各所に被害が出た。旧音羽町では水防作業後に消防団員が死亡、旧一宮町では住宅半壊1世帯の被害があり、白川や御津川が決壊するなどして市内各所で床上・床下浸水の被害があった。【音中・一中・中中・御津中】	県災誌
1979/4/1	昭和53	火災	萩で山林火災があり35.6haを焼失し負傷者1人の被害があった。【音中】	県災誌
1979/8/7	昭和54	突風	寒冷前線の通過で大気が不安定となり突風等により市内で住宅全壊1棟・半壊3棟・一部損壊15棟の被害があった。	県災誌
1979/10/18~19	昭和54	洪水	台風20号による大雨で旧豊川市域で床下浸水4棟、旧一宮町で床上浸水2棟・床下浸水2棟の被害があった。【一中】	県災誌
1982/2/25	昭和57	火災	平尾及び旧音羽町地内で山林火災が発生し21haを焼失した。【中中・音中】	県災誌
1982/8/3	昭和57	洪水	台風9号による大雨で旧小坂井町で床上25世帯・床下117世帯の浸水被害があった。【坂中】	小町史
1985/1/28	昭和60	濁水	異常濁水で宇連ダムの貯水率が0%となる。	
1985/9/7	昭和60	突風	寒冷前線の通過で大気が不安定となり旧一宮町等で強い突風（竜巻）が発生し、住家の一部破損、鶏舎の倒壊等の被害があった。【一中】	県災誌
1988/2/15	昭和63	火災	千両で枯草火災が発生し10.8haを焼失した。【中中】	県災誌
1989/9/18~20	平成元	洪水	台風22号の大雨で旧東加茂郡旭町では山崩れに巻き込まれ住民1名が死亡し、旧一宮町では下校途中の小学生が溝に流され亡くなった。【一中】	県災誌
1990/9/19~20	平成2	風水害	台風19号により市内で軽傷1名、建物一部損壊3棟等の被害があった。	地防計
1990/9/30	平成2	風水害	台風20号により市内で床上浸水3棟床下浸水74棟、がけ崩れ2か所等の被害があった。	地防計
1994/8/9	平成6	火災	御津町大恩寺の国重要文化財の念仏堂が焼失した。【御津中】	
1994/9/17~18	平成6	洪水	大雨により市内で床上浸水6棟、床下浸水98棟、道路冠水5か所等の被害があった。	地防計
1997/3/16	平成9	地震	愛知県東部でM5.8の地震があり、豊橋市で震度5弱、豊川市で震度4を観測。豊川市役所本庁舎の窓ガラス約100枚が割れるなど公共施設に被害があった。【南中】	地防計

西暦	和暦	種別	被害状況 ※【 】内は記事対象中学校区名称	参考文献
1999/9/21～24	平成11	竜巻等	台風18号の通過に伴い9月24日に竜巻が豊橋・小坂井・蒲郡の3か所で発生し、市内では萩山町や千両町、牧野町他で重傷者2名、軽傷者36名、建物全壊1棟、半壊2棟、一部損壊341棟などの被害があった。【南中・中中・東中】	地防計
2000/9/11	平成12	洪水	東海豪雨。大雨により豊川市内でも床上浸水1棟、道路冠水5か所等の被害があった。	地防計
2002/10/1	平成14	風水害	台風21号により市内で建物一部損壊4棟、道路冠水1か所等の被害があった。御油の松並木の太木2本が倒れた。【西中】	地防計
2004/6/19～21	平成16	風水害	台風6号により市内で建物一部損壊1棟、道路冠水1か所等の被害があった。	地防計
2004/10/8～9	平成16	風水害	台風22号により市内で床上浸水2棟、道路冠水7か所、崖崩れ1か所等の被害があった。	地防計
2008/8/28～30	平成20	洪水	8月末豪雨で市内で床上浸水1棟等の被害があった。	地防計
2009/10/7～8	平成21	風水害	台風18号により強風が吹き荒れ沿岸部では高潮も発生し、市内で重傷者3名、軽傷者1名、建物全壊2棟、半壊1棟、一部損壊164棟、床上浸水1棟、道路冠水5か所等の被害があった。	地防計
2011/9/19	平成23	風水害	台風15号により市内で建物一部損壊11棟、床下浸水3棟等の被害があった。	地防計
2012/9/30	平成24	風水害	台風17号により市内で軽傷者1名、建物一部損壊8棟、道路冠水1か所等の被害があった。	地防計
2013/9/15	平成25	風水害	台風18号により市内で重傷者1名、軽傷者4名、建物一部損壊37棟、道路冠水10か所等の被害があった。	地防計
2013/10/15	平成25	風水害	台風26号により市内で建物一部損壊19棟、道路冠水2か所等の被害があった。	地防計
2014/8/9～10	平成26	風水害	台風11号により市内で建物一部損壊1棟等の被害があった。	地防計
2014/10/5～6	平成26	風水害	台風18号により市内で軽傷者1名等の被害があった。	地防計
2015/8/16	平成27	洪水	大雨で市内で床上浸水1か所、道路冠水4か所等の被害があった。	地防計
2017/8/7	平成29	竜巻等	台風5号の通過に伴い前芝（豊橋市）から御津町にかけて竜巻が発生。豊橋市内では負傷者3名、住宅全壊3棟・半壊6棟のほか県指定の前芝灯台も建物被害があり、豊川市内では住宅一部損壊7棟、ビニールハウスの破損等の被害があった。【御津中】	地防計
2018/9/30	平成30	風水害	台風24号により豊川市から豊橋市にかけ大規模停電発生。塩害もあり。	地防計
2019/5/19	令和元	渇水	渇水で宇連ダムの貯水率が昭和60年以来の0%となる。	
2020/9/27	令和2	地震	静岡県西部でM5.1の地震があり、豊川市（一宮）で震度4を観測したが被害なし。	地防計
2021/8/9	令和3	竜巻等	光輝町から三蔵子町にかけ突風が発生、金屋中学校体育館や店舗などに被害あり（一部損壊28棟）。【南中・金中】	地防計
2023/6/2	令和5	洪水	24時間雨量が400mmを超える大雨で、土砂災害で住宅2棟全壊、床上浸水264棟、床下浸水263棟、音羽川・佐奈川・西古瀬川・御津川など14か所で越水、道路のり面崩壊62カ所件・土砂の流出68カ所、陥没15カ所・通行止め33カ所など（7月31日更新数値）	市被害報告(R5.7)

■参考文献の略表記 新市史：『新編豊川市史（全11巻）』、一町誌：『一宮町誌』、音町史：『音羽町史』、御町史：『御津町史』小町史：『小坂井町史』、企図録：桜ヶ丘ミュージアム企画展図録『人々のくらしと災害』、報告書：対象遺跡の発掘調査報告書、県災誌：『愛知県災害誌』、地防計『豊川市地域防災計画－資料編－』、母豊川：『母なる豊川 流れの軌跡』

■地名表記 市内の地名については基本的に現在の町名を町を略して表記し、江戸時代の村名等を表記する場合には現在の町名を（ ）書きました。

